

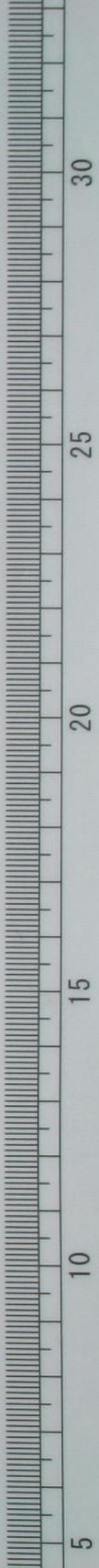


養病漫筆

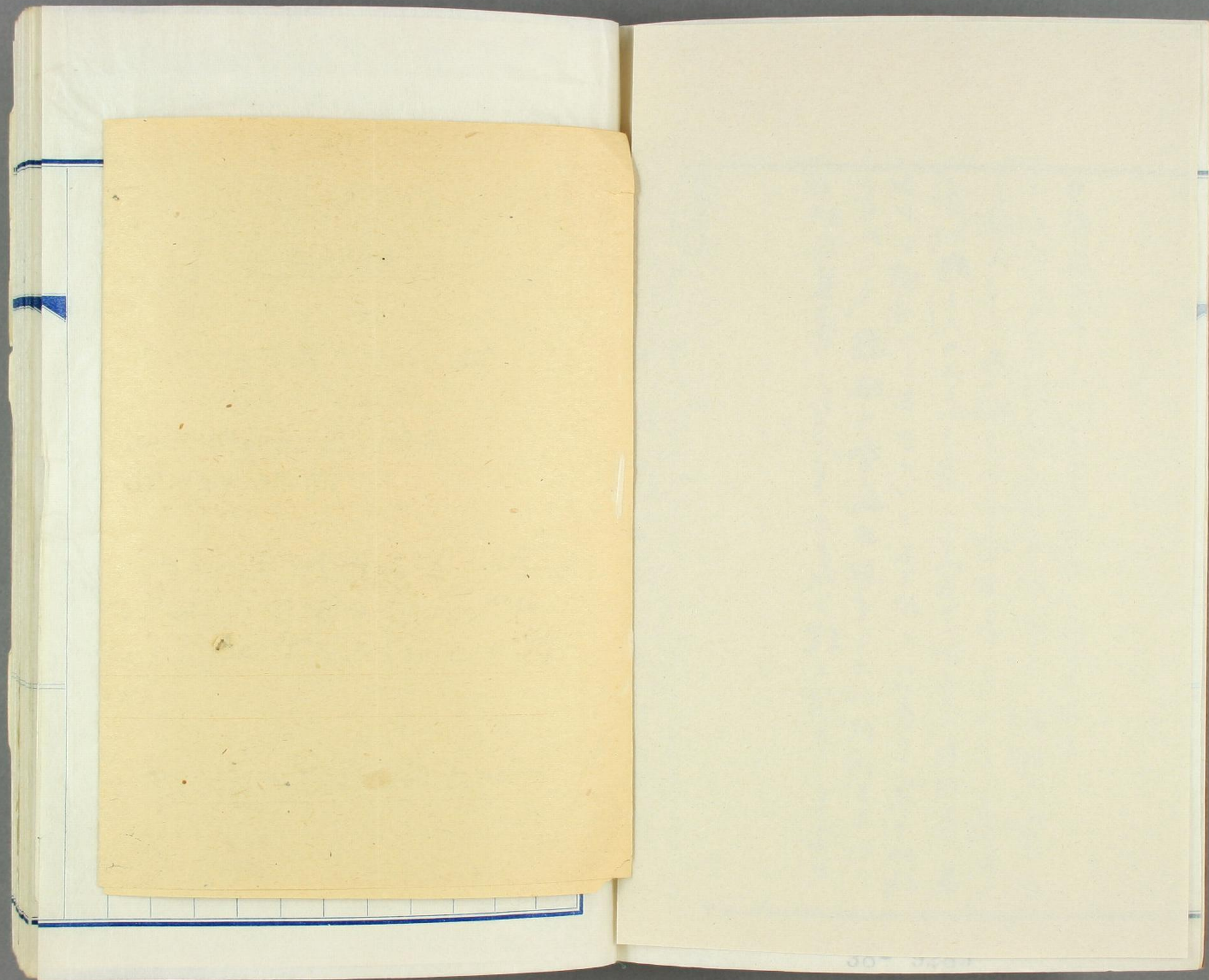
二

昭和十五年五月以降

特別  
14  
1919  
503







山深く入る信濃路も山々は、防れど様もあし

ほろろまんとすらくも、時節とがうりやうに

あるる之りか、八らの在りおらる、折耳の学、鶴云の

記するにセメント、藝術とせんもの、お後をお院の

たしやう、この物は物を打つものが、おまじやうに、お

の主人は、そのセメント、藝術を、何年にもあより、研究九

つたし、四五年以前、おに、帝、展、くも、持、く、ま、り

やう、たか、この、課、目、お、た、い、た、め、お、空、し、と、持、ち、ゆ、り

ま、した、た、感、る、人、を、お、ま、り、ま、り、個、展、を、も、再、り、こ

は、お、か、か、と、云、ふ、こ、し、れ、る、人、も、お、ま、り、ま、り、か、か、こ

お、心、お、風、な、り、事、は、お、ま、り、お、故、制、衣、作、に、は、お、澤、山

お、ま、り、ま、り、た、い、この、田、舎、に、こ、つ、と、研、究、し、こ

に、お、り、ま、り、た、ま、り、と、お、ま、り、の、記、を、お、ま、り、お、た、し、た

る、お、は、何、へ、た、か、お、ま、り、方、を、お、ま、り、た、お、ま、り、な、感、り、た、さ、れ

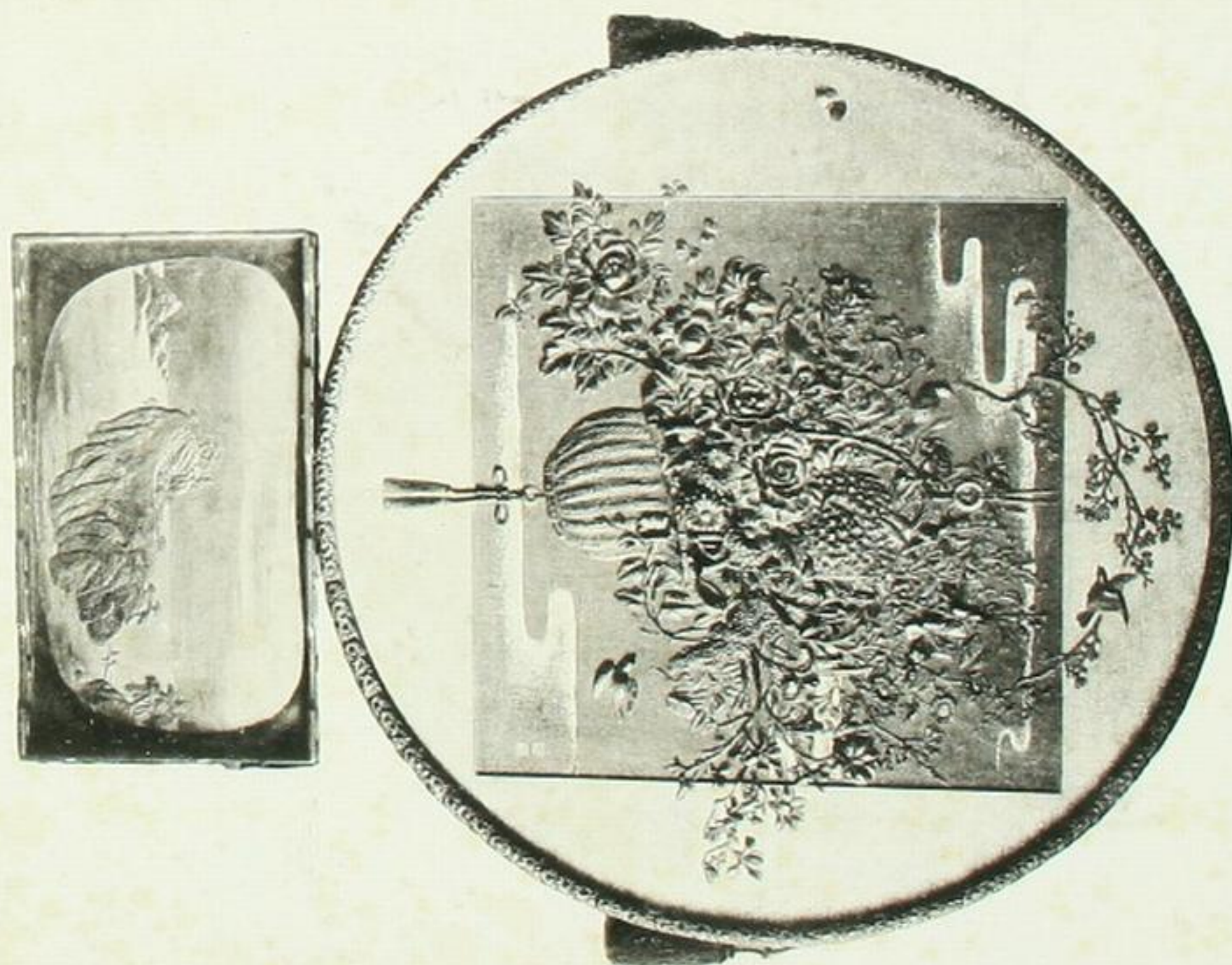




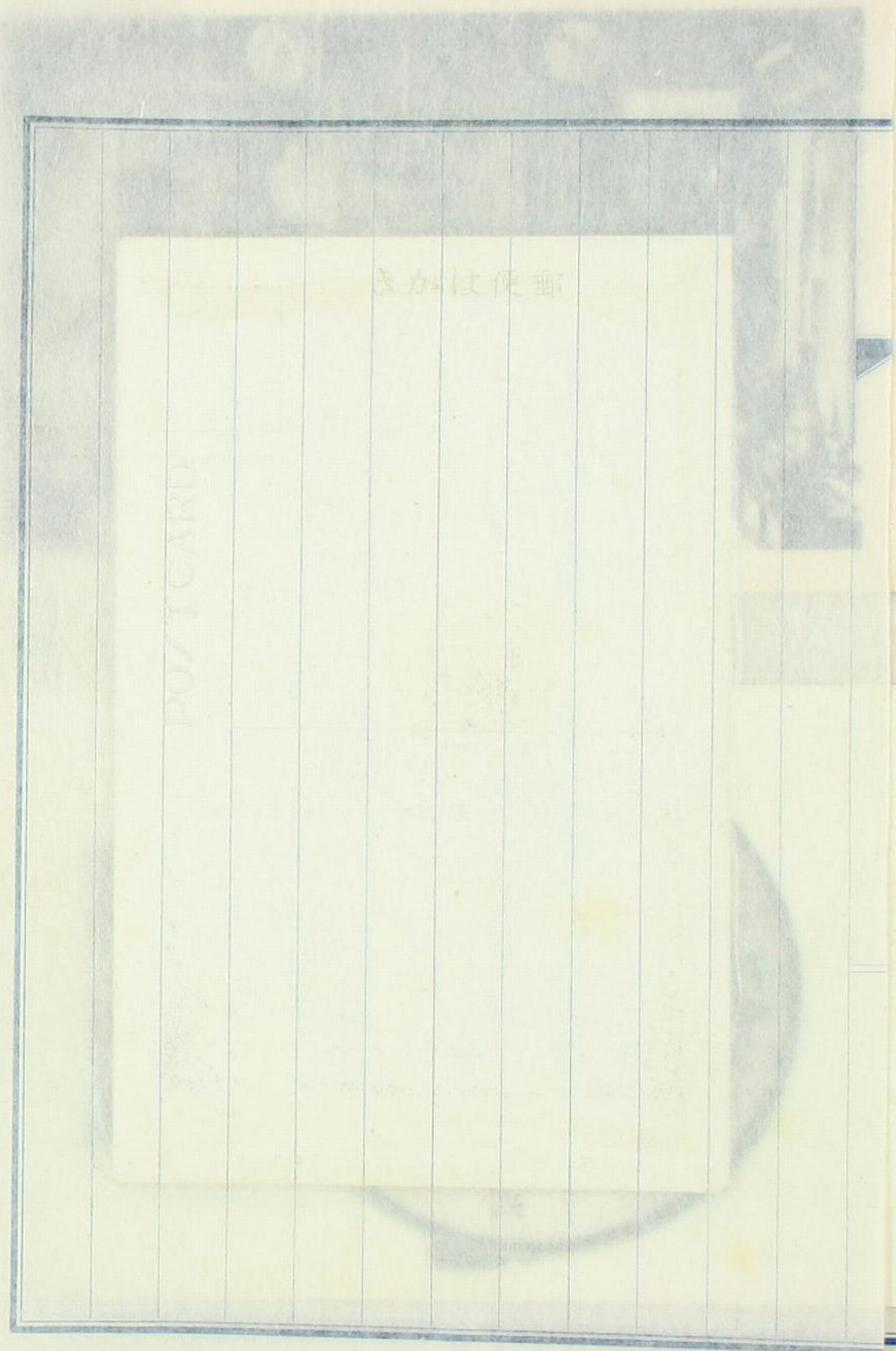
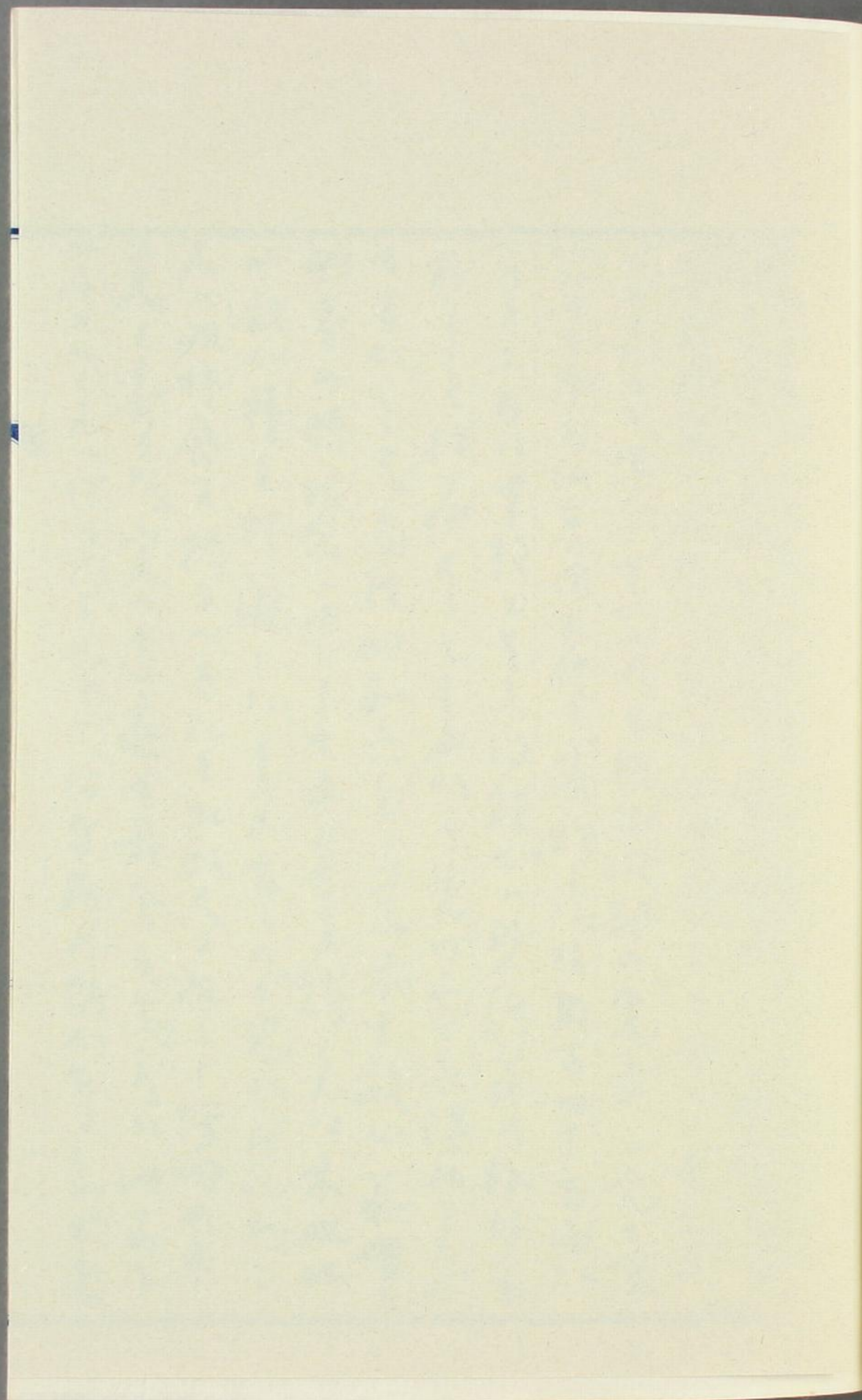
作愚香天ハ圖富ノ國ハ究研術美官左ルタレク遅



步一第作香天川小 上仕漆乾 會究研術美工泥洋和



作 彌 善 川 小 上仕漆乾主會究研術美官左洋和



きかは便郵

POSTCARD

○四五午出大槻文彦博士の死後押取として船渡瓦人の  
京都国集の版木が出此誰を買人かよく、價二束三文  
とありたりと惜んで買ひ入る、後出版部の倉倉産ふんて置  
たりと今も仙臺の同古館より寄贈され、枚数百四十両に  
うら二ろ八十枚とす、曰録に「船渡瓦人の版木を  
あつして保存す」とあり、先づ家を得たとす、  
とすかゝり、高は四尺六寸と云、木十枚が養四、  
出巻の時記念品として五枚寄贈され、木四は  
十款の押と押漉しに、よふあつて思ひ付いた、こ  
んハ双柿合又踏ふべきと此以人又押しと坊内の未  
主人又寄ると、室の道も道生前余と名、んハ酒器を  
とす、と云、伊萬王様、び、分、柿の同か、す、よ、徳





を録体と書き見え刻に比ぶれば此人の録体の餘韻得意と  
見くこころしく高古の味相ふべきものあり。此既くも秋山  
陽休あり高春鼎、錦嶺、竹の跋あり、巻末に時齋  
とよみ人の桂葉帖を呈上する上の書を言ふ意のな  
し。寓してあり、誠と稱しき帖とて、印譜に流布してあり、敢  
て河内此とありて、さしもの甚に得易かしく、すなわち此の跋と  
して跋書すべし。

此帖の末に文政辛巳春日吉々山人の意録

と録書し、認めありて、別に四行の楷書あり、小叙あり、楷書も  
亦能書る。

附記余の印篆、古々作の定印二顆あり、往年三浦竹久  
と訪ゆを贈らん、字々ありて、一印南無三三變と刻あり、刻

其の類も、但し標本としてありて、

○四月廿四日、高時庵の人形、口好合の法州と見え、時化刻し、まての  
人形法州とあり、内遠く、武の物品珠、注言を惹き、此の法州合  
を扱合に、法州時化の遺品、品々相有、又出條あり、時化とあり、人  
まての故人と認め、此の法州、口好合の人形、其の玩具、口の研究と  
認め、其の文、初の人より、西洋第貳巻、其の門派と見え、を得べし、  
時化の外神田、住し、ゆ、法州、み、車、の、み、大書し、車、を  
の、書、記、方、ち、り、か、土、休、俗、を、書、き、人、物、も、面、白、い、仁、ひ、あ  
つ、は、自、分、も、相、當、り、定、か、り、先、が、お、家、の、就、も、法、州、の、經  
々の玩具を見たり、又或る時、八連ん、ま、つ、て、電、灯、の、法、州、標、本  
を、飲、ん、て、書、と、賞、し、た、こ、と、を、思、ひ、出、す、時、化、を、繞、る、事、古、枝、葉  
の、竹、内、久、一、と、い、ふ、か、ら、い、か、る、を、る、の、書、原、に、行、く、の、し、り、と、目、録

作された本町の向裡離や昔ながらの自今七令る所花してあり  
 町の心先を謀したからごんるまも去米はのいある、町へ土俵信の  
 書けりごんるまも心先のごんるま土俵信を書いたこともある、本  
 往りの珠くしい玩具を寄せてうろわの友と云ふ三四冊の本も  
 出候にこのころうろわも流布してあり、町への致後其花品  
 の大部今ハ林若樹の手も付れば、まんがごんるまもいなり内  
 へ毎づいやくあふ見へるも町への時代ハ古の玩具も  
 注をを掛ふ人も無のころは、町へな信の拾い上げん、解  
 かつにい見切らる難い、自分もまた玩具を託し多々の趣味  
 のあるもの、町のふたつ流すやうのあり、

○余ハ文藝今皆四部一七架中見許ありて、此の教の  
 書画を檢りて、芥川一二、●小治王得たり、まじ等閑にす

へかりしより、其一百枚和尙本校漢語ハ二音せり漢文ハ尺牘  
 也、長さ六尺正摺を以て認る書楷体、文字共に謹密、特ハ  
 七枚子とるす、文ハ漢語ハ神々甚く、十六巻編録成るを  
 祝し、信々史論ハ及心、足如甚、●豊公の事、東条の信今ハ  
 前稿の間に云ふ事也、七枚字鳥悲、此の稿の裏勢うりて信々  
 信々神表の透る餘烈して百有餘歳を任り、今日千文、新ハ新漢  
 尺牘化洽、亦不もろかると云ふ、其功徳を稱し、其の著を揚し、其の  
 名を以て泉谷野神元美と和南と歎し、印ハ押してある、其和南  
 名元美と云ふ独釣雪と又元橋と邪し、路西法花寺の御基  
 かり請文及書畫を甚く、文正二年二月十三日、取して、わ  
 の享年ハ十有三

他ハ一ハ頼山陽樂翁公を築き、文を刻り、書牘して、文ハ山陽



このこと存し録るんが難しう思ふに都しては出づるのこともすし  
南画の詩は又抑々る作詩を才公のまじりしもの思ふ  
る程く、往々自家の心事もは露一こりの所は井田の  
を補ふべき材料もあつて而らうい、先づ南の詩を  
ての由身目と過すこと一懇到であつて、井田の  
の前途に際して常にか想念する、故くあるが、遂に天  
の惜まへまじりあふ、意しあふ、年輩、此生を  
出づるの人のところの如く相違ない。今た書局中  
を二三  
か不を抄出さす。

(上果) ね近來の書人の如く、定る好同を深山の  
るに十分補上と云ふ、故く、  
るに出来ぬ、一人、  
一書



と進め二枚と云ふ二書を進め、  
泥舟、  
く進み、  
浮山に  
ども、  
りえさ、  
所、  
字、  
一向、  
一、  
一、  
一、

筆の推身粉骨の働をせねばならぬ  
只今もいふ所のとおき、後款申す

本千庵老丸、歌に古守、中、母、所、路、雪、山、領

額、三、馬、山、延

津田生野赴、前、院、を、庵、井、お、請、り、ゆ、其、家、出、峯、江、小、宮、  
少、翁、有、り、ら、江、丸、社、五、山、堂、比、良、命、口、因、作、此、因、係、也、  
為、終、(下、取)

方、比、の、二、間、入、の、左、の、ぬ、く、と、あ、と、あ、

此、春、の、上、の、の、由、甚、阿、の、下、古、作、の、長、も、今、と、あ、の、中、  
終、の、日、田、竹、前、し、美、り、古、意、且、又、今、後、を、取、り、分、と、  
一、為、神、上、達、且、又、信、し、春、丸、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



書、り、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

上、(一)、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、







山陽舞子活書感七帖

山陽先生舞起舞子活一册為例此以當時  
所賦而也任天保二年九月所賦其筆法  
一氣呵成馳筆行墨流動頓挫有快  
生全と評筆一册一可為英鑑令と評  
於一言

山陽先生大塔宮詠史七律詩書

文政十年丁亥山陽先生齡四十八詔藏王堂上感大塔  
皇子慨然而所作書則五十二歲西歸途次於備  
中客舍所錄落筆不苟行墨齊整正文字圓熟  
入其平生所張書論秀潤之境公矢此詩書所傳世  
甚罕也本幅殊係晚年所書可以為珍鑑賞之餘  
茲識一言

四月廿二日此日在出身の詩人皇中活書より日蓮花  
山陽の活書と抄くあり送迎を以て即座とて左  
三尚は活本二枚の送迎と書見んことを當りて  
七印座に在り居りて時とありすこと二時十前十一  
とて一時二進び午おと氣の安あつたこと  
七印中の一帖也

〇この家傳の雜書なる四十五と早大回と録と存  
し然れども又百はちとて字所は早大と無いよと  
考へて書附するものも送迎とありての而倒れあり  
とて送つたものも美術の用するものも多し洋書も  
若干ありて評書は日本とて同するもの支那のもの  
同するものもあり大隈侯の信託係るものも同す

有る年故郷を言ふとせしむる十餘冊又人知ると  
えんし寄附の内をかくれ、又五十年の北沢詩話初稿十支冊も  
竹花の遺稿も保存して置くべしとて、同書の日記に記し、  
父家の由緒も記し、同書の日記に記し、  
えんしは、先づは、筆を絶つて、故郷の文藝のあつてもよく、  
とてメテ余の関心は、海へ回れ、水もへた、  
懐かしき所、いふ人等、いふ人等を、  
贈の回を、同書の日記に記し、  
とて、いふ人等、

五月二日の記

とて、

四月三日の記、  
同書の日記に記し、

標準製

# 全縣民の必唱歌

## 光榮・當選者決定

### 海遠く大連烏越強氏

### 竹内式部頌式内竹

海遠く大連烏越強氏  
光榮・當選者決定  
海遠く大連烏越強氏

海遠く大連烏越強氏  
光榮・當選者決定  
海遠く大連烏越強氏

海遠く大連烏越強氏  
光榮・當選者決定  
海遠く大連烏越強氏

海遠く大連烏越強氏  
光榮・當選者決定  
海遠く大連烏越強氏

### 斯くして選ばる

### 選者の苦心

選者の苦心  
選者の苦心

選者の苦心  
選者の苦心

選者の苦心  
選者の苦心



選者の苦心  
選者の苦心

竹内式部頌歌

大連市大連神明高等女学校

四月三日

五月二日

初

竹内式部頌歌の教へたる幾十冊を讀んで

大連市大連神明高等女学校  
 四月三日  
 五月二日  
 初  
 竹内式部頌歌の教へたる幾十冊を讀んで

# 竹内式部頌歌

## 全縣民の必唱歌

### 光榮・當選者決定

#### 海遠く大連鳥越強氏

是は、ふるふる星紀  
 二千六百年前  
 竹内式部頌歌の教へたる幾十冊を讀んで

#### 斯くして選ばる

#### 選者の苦心

苦心の作品が最良のもつて決  
 定し、全縣民愛護の郷土の  
 偉人竹内式部先生を讃ふるの歌  
 は正式に決定を見たのである。

**外科** 松林清廣  
**一般** 唐津英作  
**小兒科** 高橋健彦

**松林病院**  
 電話二一四番  
 新田 竹町



の自分ハ四十数年の専ら早大の同志と行つて此の  
の創立者故長とつとて創業功を多くの同志を誘入  
ハ其の回を多くして自分の意味のいふにあらば、其の踏  
入を極く速く、後の者もくつとすることを思ひつゝ、  
在りて其の集りて、随つて善道に回ち、其の思ひつゝ、  
このころハ其故ひある。自分ハ同志故をいふに、時に書物に  
のいふもあつた。即ち早大の出版部が十数年、いふく出版  
一ハ、又之の場合と行つて、七月一日二冊の評書を出し、  
圖書刊行と考へて、未刊の同志と共刊し、又稀を  
獲むし、その一、秋風の季を二十五年刊し、およそ其等の  
書物ハ自分ハ、衝口言つて、早大の同志のいふに、其の  
と、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、

早大

尚ほ自分ハ、文藝上他ハ、少くも、早大の同志のいふに、  
道一、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
尚ほ田中、其の題名、其の題名、其の題名、  
五、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
新、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
所、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
贈、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
志、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
文、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
十、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、  
く、早大の同志のいふに、早大の同志のいふに、





まゝ、三十年間の冊致と各けし二百五十冊  
貝本の既年十六七巻の材料、此の冊子のゆゑに  
ふか、三葉を惜しいといふも、三葉の書と  
焼き三葉をやく。覆写用ひやくすると思ひ、  
七巻、彼を保書を致し、一巻、絶命厄女子  
くく、字附し、所々、読者、益する所を  
かゝり、之を家へあまう、くく、教か多く、父祖  
の山、い、家、あ、後、か、況、小、お、  
あ、自、か、新、年、は、未、か、い、尚、電、令、  
た、ま、あ、す、ま、

河合虎三郎の著書と著者の書物致すの題連と

河合

し、中、三、相、三、午、の、花、美、派、の、長、命、の、持、つ、あ、北、海、道、珠  
の、教、育、所、と、聊、か、異、な、る、所、は、あ、る、こ、こ、は、北、海、道、珠、の  
字、を、あ、ら、わ、る、く、鴨、居、時、二、十、二、算、と、な、り、彼、ん、の、  
才、致、く、い、ふ、の、あ、る、

○原、久、一、郎、の、全、譯、大、ト、ム、ト、イ、全、集、二、十、二、冊、成、る、各、冊、一  
千、頁、以、上、十、年、業、を、起、し、四、年、有、半、の、し、成、る、五、行、書  
に、三、萬、二、千、頁、カ、の、り、と、い、ふ、べ、し、出、版、之、中、央、公、論、社、  
リ、推、薦、文、と、納、り、ん、て、産、し、て、之、ん、を、ま、す、

○雄、山、田、書、之、友、の、情、に、産、し、山、陽、と、休、田、の、交、情、を  
出、支、山、陽、の、書、に、就、て、数、々、著、し、た、こ、と、あ、る、竹、田、と  
山、陽、の、交、情、の、之、ん、を、始、め、と、し、紙、短、く、と、多、く、決、り、  
●こ、こ、を、選、録、す、

北溪遺珠

五串

丙午七月廿六日與大槻子寬游嚴美溪詩以紀之松崎惺堂作記填五串以嚴美

余讀柳洲記曾疑多溢辭山水滿宇內豈有此怪奇何料鉛鉅潭在我東陸其名嚴美婢如邈姑姿丙午秋七月仙臺逢舊知曰住磐井曰里嚴美一竹印枝聞之喜欲狂理瓢神已馳一水西南來峴巖巖疊兩涯森然錯矛戟屈曲與水隨無物不鬼設靈怪絕人為飢龍吞渴虎

大湖曰丙午  
弘化四年也  
鴨崖年三  
十二

詩文叢書

奔牛駕伏獅壁立如厦屋呈奇互參差加以奔水昂  
低灑淋漓拋雪成懸瀑浪碧淨漣漪有橋駕空起有閣  
踞嶽巖橋可以恣目閣可以銜危一醉倚危檻萬象呈  
無遺柳文盡此景初知不我欺獲此怪奇景憾乏怪奇

詞

鹿門曰

鴨崖游此廿一二歲才華煥發咄嗟成章大

湖山曰

怪奇之景寫以怪奇之語即是柳別之流亞

大湖曰

雄偉之才多長於七古而短於五古鴨崖篇

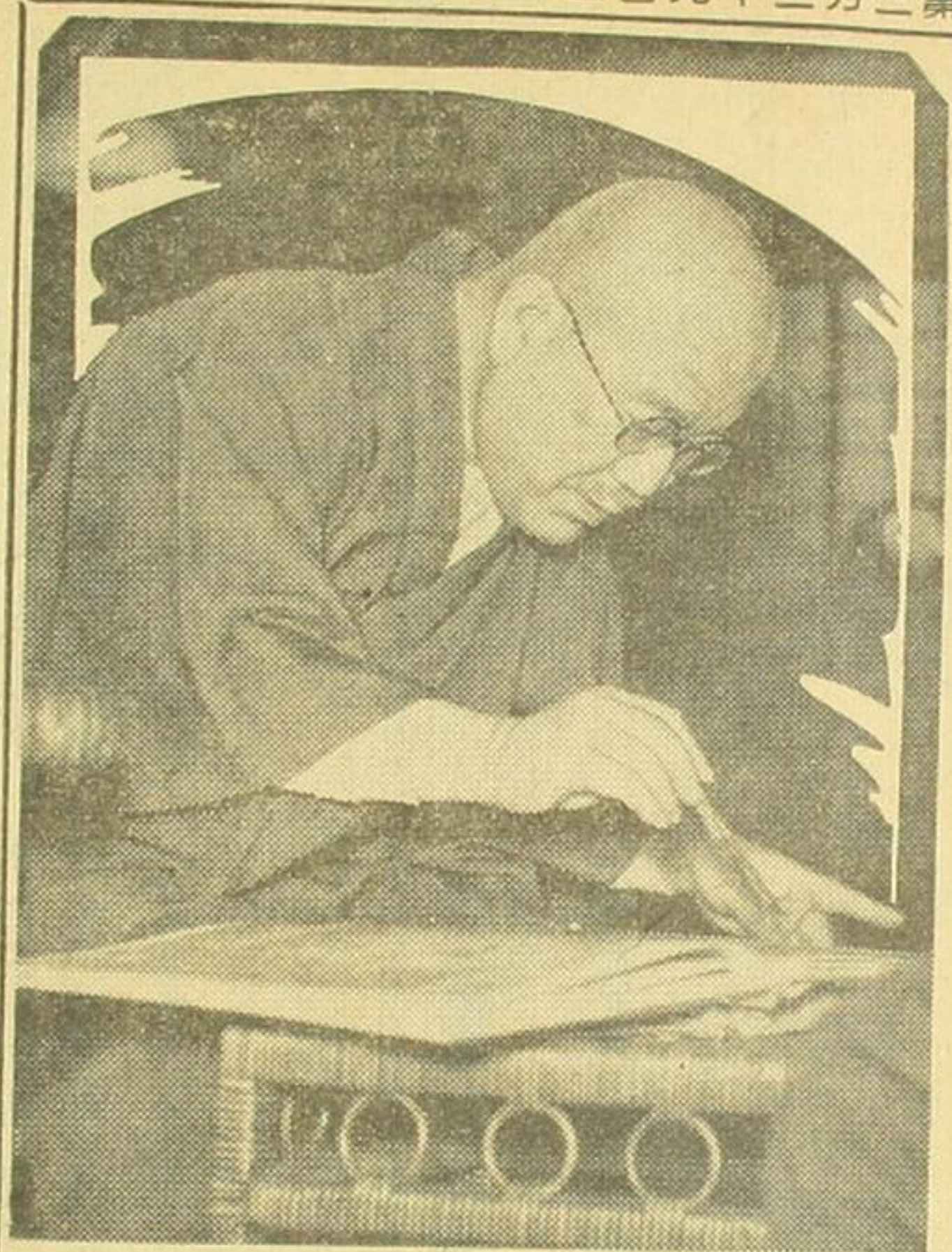
長雄偉之才多長於七古而短於五古鴨崖篇





劣なれば、この物逸の多かり精銳の空軍を有してあ  
 る、是以謀威治海、英の甲艦、獨の一隊のありて、  
 沈没し、こゝに爆弾かゝり、軍艦を撃つ、得る言  
 を示し、とらんと、極力、口、獨の飛行  
 機の一持機、爆弾を投下する、此者、高く上昇  
 して、空を飛ぶ、能力がある、と云ふ、  
 兵、この、  
 砲力の、  
 と云ふ、  
 かく、  
 獨逸の、  
 信略、

機動



戰でその死命を賭すものは兵器である、要は、その威力を發揮

### 走る要るに

# 二百五十キロ砲

さてこの重大  
 艦砲の走を  
 るものは機動  
 した、  
 マジノ砲を越えて、ベルギーに進軍した聯合軍は十日夜、ルクセンブル  
 と、  
 一方オランダにも英軍が上陸したと傳へられ、マジノ、ジッタ  
 砲の間に固着してゐた、  
 二百五十キロの砲、  
 歐々飛  
 出すか  
 歐洲戰の新

八百、  
 聯合軍、



この如き米の日本を志するは氣さしむる尤も用力ある中  
の日本は勿く無へ、米の爪生え海軍の未成とせしむる  
も日本は備へたるべき事、ソノ船は多く速く、利をゆき  
ゆきあるが故に優利の態をとつてけること、出まき、物  
の操縦もよく、とらうかていふ、此の英艦はソノ度ん  
後、米と我國とあつる、前途我國の戒心を安んずるに  
外あり也

五月十三日記

英艦と我艦とが海戦を起し、米艦は甲艦を  
一と少くも、この如きあれは、日本や米回や伊國が  
せんが、艦船は強く、これ等、いんか、高河戦  
をやる、英艦と我艦と海軍力をいひ、その弱あり  
せん、米艦は有力、中上回の力を増す所あり

海軍

あり。

英艦の戦艦の勝敗か急な決つたとすると勝日  
初日在つて、その日の勝日、英艦側より、いんか、  
英艦の度んか、日本の敵ハソノ艦と米回也、ソノ艦  
この支が、我艦より、米回より、大に洋軍に勝つて  
日本の海軍も、この邊より、大に海軍中も、  
ソノ艦と我艦の決つて、いんか、米回も、一物也  
この如き、政府の戦艦も、我艦より、東洋も、  
最後も、我艦より、勝つて

パイロット戦術を因に、自軍と、於て此の兵士は、正統の軍  
服を着て、たふさ、スパーを、鏡殺せる、このまは  
又、我艦の戦艦も、我艦より、勝つて、我艦より、勝つて

鏡教了るは白圓の捕書、得一人を引十人鏡  
殺しと報復せよと云く此の

○白丸の教の書通の内、小巻の一つあり、その  
ハ等類、長瀬村の守家、富家の題字あり、成  
島柳北、菊池三行の社名あり、琴女、天の橋  
まつりあり、最良、村田香呂の画あり、白丸の書  
形あり、小品、回志を呈せ、得れ、琴女、天の橋  
の何れあり、このちうううううう、此の書、刊行  
の日本、書通、使して、見、初め、此の書、あり、  
分つた、女、柳北の社名、菊池三行の社名、あり、

白丸の書

此の書、白丸の書、西洋書、あり、  
此の書、白丸の書、あり、  
中、白丸の書、あり、  
十、詩人の埋没、と誰か、あり、  
ある、久保天池、の伴、あり、  
作、白丸の書、あり、  
と、白丸の書、あり、  
女、白丸の書、あり、  
白丸の書、あり、  
白丸の書、あり、

白丸の書、あり、  
白丸の書、あり、

甲戌春日贈琴水女史

柳北道人

三行の詩

小夜無人看影斜、春雪晴雨後、空如鳥、  
不動若雲、一單軒烟澹滿花  
甲戌四月為琴水女史、三行詩

藤原製

天才的な妹さんの幼時からの繪を通して、その短かかつた生涯が語られてゐる。それを讀んで、私の胸も苦しくなつた。畫に天分があつたお幸さんが、女學校時代に、圖畫の成績が悪くて學校から注意を受けたことなどの書いてあるのを見ると、憤りに近いものをさへ感じた。かやうなことは私の知つてゐる方面にもあるが、兒童の持つてゐる特殊な素質を伸ばすどころか、それを認めることすら出來なくて、何處に教育があるのであらうか。

「中原君と私」には、壯年にして逝いた彫刻家中原悌二郎氏との交情が精しく敘してある。それを讀んで、中原氏以て賤すべしといふ氣がした。その中に、石井氏が小さい時養家で、馬鹿だ馬鹿だといはれてゐたと話すと、中原氏が、俺もさうだよ、といふところがある。何でもないことではあるが、そこに迫つて來るものがある。

「坂本繁二郎氏小感」には、坂本氏に對する敬愛の情が筆端に吐露されてゐる。然もそれがいくら褒めてあつても少しも厭味なものになつてゐない。人を褒めるといふことはむづかしいが、人を褒めて、かやうに氣持よく讀まれる文は少いであらう。

「山と幻影」旅の追憶「それから」觀心寺・高野山・奈良」の諸篇を讀んで、私などは自然に對し、また古美術に對してこれまでにいかに鈍感に過ぎて來たかを顧みて恥入りたくなつた。「凸凹のおばけ」は、本文の用紙も特に上質の物が使つてあつて、圖版も豊富に入れてあるが、それらの著者の過去の作品をちつと見てゐると、やはりこれは石井氏の畫だといふ感じがしみる。起つて來る。畫にも文と共通したものがあつて畫からも石井氏の人物がそのままに感ぜられて來る。

石井氏には私は、僅かに一面の識があるが、この書で讀んで氏の人物が始めてはつきり分つた氣持である。よい書物を讀むと、それを人にも勧めたくなる。殊にこの書には不健全なものも少しもない。私は今後折のあることに、年少の人々の心の糧としてもこの書を勧めたいと思ふ。然も文部省や何々團體の良書推薦にかやうな書物を逸してゐるのは、良書推薦も甚だ心元ない本と思ふのである。

琴水女史とその著書

久保天隨博士の詩話茶前酒後を讀んで、私は始めて明治以降に女流の詩人として知られてゐる人の誰一人ないことに氣が附いた。然もその間に白川琴水といふ優れた詩人のあるこ

とを、博士に據つて教へられた。明治中、閩州絶えて詩を能くする者無し。而して白川琴水獨り巾幗の爲に大いに氣を吐く、尤も異と稱すべき也。博士はかやうにいつてゐられる。そして琴水女史の略歴を述べ、その什の幾首かを擧げてゐられる。女史は高山の人、京都在住中に詩を贊として成島柳北をその旅寓に訪ひ、柳北の紹介で菊池三谿の門に入り、詩文を併せて一家を成したので、その著書に琴水小稿と日本烈女傳とがあつて、世に行はれてゐる。博士はかやうに書いてゐられるのであるが、琴水小稿も日本烈女傳も、共に聞くところのなかつた書物である。私はそれが一讀したくなつて、帝國圖書館その他の目錄に當つて見た。ところがそれらは明治年間の出版物たるにも係らず、つひに何處の目錄の中に見出すことが出来なかつた。

しかし、さうなるとなほのことそれらの書物が知りたい。ついで私は女子學習院編纂の女流著作解題を検した。日本烈女傳はそれにも出てゐなかつたが、琴水小稿の方は僅かに五行ばかりの簡単な解題が載つてゐた。それは明治九年の刊行で、四六版の活字本であるらしい。解題には最後に「本院寫本所蔵」としてある。女子學習院では、いづこかから刊本を於鳥。流泉響似琴。仙童尋不得。一路白雲深。「春雨」にいふ。「梅花落盡雨如絲。銅鴨煙消冷翠帷。啼鳥不來春寂寞。小窓明處讀唐詩。」「山城寓居雜詩」の内の第一首にいふ。「客窓秋夢夜淒清。雁語帶霜寒洛城。月在天心故山遠。誰知今日倚門情。」

東瀛詩選はまだ見ないが、茶前酒後に引くところに據れば曲園は、「琴水頗る古體に工に、閩媛中に在りて得難き者と爲す」としてゐる。女流で古體を善くしたといふことは、誠に珍しいであらう。その「圮上奉履圖」にいふ、「笑把鐵推犯萬死。副車一擊噫危矣。圮上老人神耶仙。折他豎子忍小恥。君不見漢家鴻業四百霜。拏而捧之輕於履。」同人詩選中の詩にはさすがに女性らしい感情の流露したものが多く、さうかと思ふと、かやうな雄勁な作もあるのである。

茶前酒後には、女史が繪事にも工だつたことも述べてあるが、名古屋市史に據れば、畫は始め村田香谷に學び更に後に外人に就いて油畫をも學び、明治十一年に開かれた京都博覽會にはその油畫を出品して賞牌を受けたことなどもあつたのだつた。一方漢詩を作り、一方油畫を畫く。たゞの保守的な婦人ではなかつたことが知られて来る。或はわが國の女流の

借りて寫されたものらしい。女流著作解題には、解題の外に女流著作家の略傳をも纏めて出してあるが、その方の琴水の條は、名古屋市史人物傳と濃飛文教史とに據つて傳が立てゝある。それで私はその二つの引用書をも披閱して、女史が安政三年に生れ、明治二十三年に三十七歳にして名古屋に歿したことなどを知つたが、濃飛文教史にはたゞその七絶一首を擧げてゐるのみで、著書に就いてはいふところがなく、名古屋市史人物傳は著書として琴水小稿を擧げてはゐるが、傳中詩を善くした一事に就いては何等いふところがない。それが物足らず思はれる。

明治の閩秀文學者として知られてゐる人は多いが、なほ琴水女史の如き、夙に知らるべくして知らるゝに及ばずゐる人もあるのである。然も茶前酒後に據れば、齋曲園の東瀛詩選にも、陳鴻誥の日本同人詩選にも琴水の什は收載せられてゐるので、琴水は却つてわが内地よりも、海外に認められてゐるのであつた。日本同人詩選は幸にして私の勤めてゐる蓬左文庫にもある。私はそれを一覽した。

同書には、琴水の絶句八首が採録してある。今その中から二、三首をここに載せて置きたい。「題畫一にいふ、「繪壁高洋畫家としても、女史は最初か若くは最初に近い人であるまいか。女史は名古屋の青木氏に嫁して一男一女を擧げたが、その女がまだ才藻があつて歌を善くし、曩に新年の勅題に豫選の榮を得たと久保博士は記してゐられる。愛知縣史を檢するに大正七年に豫選に入つた青木稔子氏が、その人らしく思はれる。聞くところに據ると、この稔子氏は今に健在の由である。次回に名古屋へ赴いた時には往訪して、その母君のことどもを聽いて置きたいと思ふ。それにしても琴水小稿、日本烈女傳の二書を手することは出来ないものかと思つてゐる。久保博士の茶前酒後に據つて、圖らずも琴水女史のことを知つたが、同書からはその外にも教へらるゝところが多くて、これは近頃快讀した書物であつた。同書は昭和四年に刊行せられた和装本で、「卷一」としてある。私は博士にかやうな著書のあることをも從來全く知らずにゐた。多少留意してゐるつもりでも、私等の氣附かすにゐる書物がいくつらでもあるのである。卷二以下も出てゐるのかどうか、私はそれをも知りたくて、帝國圖書館へ行つてカードを檢したが、それにも卷一の一冊が出てゐるのに過ぎなかつた。

の二葉の句ハ方々抄録して夫のハ久人と書きたりし  
ところハ此の詞ヲ棄して七考の記を拾ひ注しとまじ  
おぼしむる三田の句を得たり

一 一也しくも 熟柿件同の座に此きぬ

一 我家の煤井色の氷粒うら

一 ふーま也けしんれ家じをあの月

一 日出るさかかくの海と夕暮の二葉のーく宿  
釋のちくさめ

一 大敷の隅のふさみん 算の外てかゝるを身をか  
および

一 むさーびや涼とあさくまがら

一 おお夜。憶くことこ 日出るけし

一 女も涼うーまーとくひむらじ

一 ふううさや山もまらけ花のうら

一 一ウーよ 晴るよすらけんじ

一 人の身(く)くく山に雪の法はけけの春とを  
かくし

一 立秋もまーの 重がけ

一 初まわすもゆーす

一 銭のぬ所もゆくさくさ

一 けをを 雲ぬれ 借りも寝たうけり

一 豊野ばくちや 波の中ききしん

一 山江への 敷入もせせ 二千年

一 朝もあしあふつてあうと 二葉の 雪の 二葉と



夜も思ひさへたり

一 ばかり死かしくとよふ事この世にありて  
来つてぞせん

一 昔はあまの身を道連れにたてしけり  
世上の涼しき

一 つらぬぬの中かき雲の出せしけり  
一 今の代や行義にまぶこころあり

五月十五日の録

〇老河のふれに流方から来た僧のきと説いてまのを  
あやしき由進擇して保をまゐりしころね許しとおお  
のあんばい移し揮ふ時つらふれえ未ゆかり

雲中に身をまきアムハムが大の取交わるるひある生可成り  
ちの在、前島おけ、地とに会地ありて建した時三十餘是こ  
うの所たしとあふかきまふ。雲中へまゐりてふしうのわ新ぬと  
しこのて、一ふれと終えし道中へまゐりてふしうのわ新ぬと  
のこゝろふれいふ。新ぬの終えしとて、まをまゐりて、道に  
アムハムか、新ぬをばりて、此の道場ありて、あれを  
ゆきを捨てると、自らの文あり人から祝ふと、まゐりて、  
新ぬのふれいふ。其の由あるの事、終りて、海ありて、  
新ぬをまゐりて、元りのつらふれと、其のまゐりて、あれを  
くまぬるふれ、今終りて、人のまゐりて、無難なり  
反故と、まゐりて、あれを、まゐりて、まゐりて、

ほのまゐりて、島お抱月、池の龍、尾崎紅、小波、人、同の

日向三木  
 日向五郎  
 日向六郎  
 日向七郎  
 日向八郎  
 日向九郎  
 日向十郎  
 日向十一郎  
 日向十二郎  
 日向十三郎  
 日向十四郎  
 日向十五郎  
 日向十六郎  
 日向十七郎  
 日向十八郎  
 日向十九郎  
 日向二十郎

香、寺崎各業、大口田畑、坂口五斗、指のぼり、市田川、  
 杉山三郎、坂才三郎、島之次郎、本田幸一（程）  
 伏木信忠、中村進平、赤坂又次郎、笠原善助  
 長田秋清、建部水城、大坂恒常、杉本屋四、市島信吉  
 朝倉重徳、恒原山直、市島孝彦、小野惣一  
 等、いふがさうす人、程々の折の記念と、百八十五、百八十六、  
 外、内から字のせんで、あつち、高田前、信忠の跡、あつち、一、二、三、  
 四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
 二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
 三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
 四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
 五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
 六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
 七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
 八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
 九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

日向三木

日向三木  
 日向五郎

日向三木の記念として、いふがさうす人、百八十五、百八十六、  
 外、内から字のせんで、あつち、高田前、信忠の跡、あつち、一、二、三、  
 四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、  
 二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、  
 三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、  
 四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、  
 五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、  
 六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、  
 七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、  
 八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、  
 九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

本風俗、潤澤、珍貴、は取り付て冬もあつて  
 漢、割橋、物、贈り、寄贈、する、こと、う、れ、た、家、庭、の、ま、り、め  
 の、え、い、と、し、ゆ、え、と、こ、り、の、ま、り、め、の、ま、り、め、の、ま、り、め  
 と一冊の、あん、から、こ、り、め、と、ま、り、め、の、ま、り、め、の、ま、り、め

〇同、じ、録、録、協、会、の、伝、載、を、し、德、の、頼、命、王、の、紀、の  
 八、十、九、年、を、ま、す、の、り、う、く、あ、る、が、法、載、録、の、後、後、前  
 と、録、金、五、十、五、回、伝、載、を、り、す、本、刊、金、二、九、七、年、任、事、前  
 後、の、起、り、所、法、と、う、ろ、を、数、年、と、記、し、る、を、亡、年、の、初  
 め、に、記、す、の、へ、ん、え、せ、に、か、つ、り、の、義、傳、家、の、ま、り、め、の、り  
 五、十、五、回、を、出、版、し、候、事、中、件、の、り、を、記、し、る、の、り  
 公、漸、々、と、法、載、の、田、恩、と、稱、目、し、得、る、こ、と、う、ろ、の、り、め、

〇此、刊、の、此、刊、自、分、と、法、載、を、し、録、録、録、任、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、の、材、料、を、案、を、し、同、じ、録、録、録、任、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、と、同、じ、録、録、録、任、の、り、め、を、書、き、し、り、と、ま、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、求、め、て、ま、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、書、き、し、り、と、ま、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇法、載、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、  
 〇録、録、録、を、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、の、り、め、



表白

漆君夫人書下未謀一面字然至書  
 幸甚莫見尤第翁表許視父視  
 而夫人與之交是猶父執也令郎亦  
 膏介豐後館崇里見徵表詩  
 是已知有恙也今因整生有歸  
 謂者唐突欲有請表也  
 於世無所嗜獨癖於印自  
 謂少小總志任進肆去風騷

駱人之於漆君家漢形猶仕者之  
 銀靴鍊鍊也其美觀喜其  
 正在于此故四方名工無不購求  
 獨步高其若刻渴望有年近  
 館美里來自南海云無欲多蓄高  
 製者益因漆君翁求之翁好事愛  
 才必不相拒也夫令郎因美里求  
 待表因美里求印蓋宿緣也  
 抑不表詩博美於右印不啻蝦蛄

釣棘籟、雖於表誠得具二函、多  
 於得、弟石未章早矣、戰國英雄為  
 朱章所鼓舞、毅以斬將奪  
 旗之功、今表雖弩弱、文陣訪  
 用、將回報於丈人焉。  
 梁谷丈人座下  
 二月十五日  
 賴 襄再拜

賴襄

晨辱得回音、披緘薰誦、宛如面語、  
 高翁印件、不恕在矣、盡情周旋、  
 撓撓尤甚、貴社中代為懇請、致  
 其割愛、感喜曷勝、然來書如  
 曰是不足、以若爾、請嘗試投與、  
 苟不中意、還亦不妨、表也把  
 玩累日、所謂覆擁二字、在其人  
 必有緣故、而於余不解其何義、  
 則珍而襲之、終不又用、不如是依

敬還上、以復其故世、嗣後不必奉  
頌焉、特在懷不忘或忽有睹、而見  
再披、何幸如久、江南設印影、敬領  
幸甚賜、雖無其印、猶得見其影、  
鑿諸千里馬骨、僕將千金購之、以俟  
真初至耳、詩箋數張、微弊家之墨  
敢不存念命、得便歸味、裁得稔音、  
奉禮殊甚、伏冀海容、勅至有歸  
領者、告別有音、挽而留之、走筆此  
際、各丈人、亦亦下  
顛 襄頓首  
九月十五日

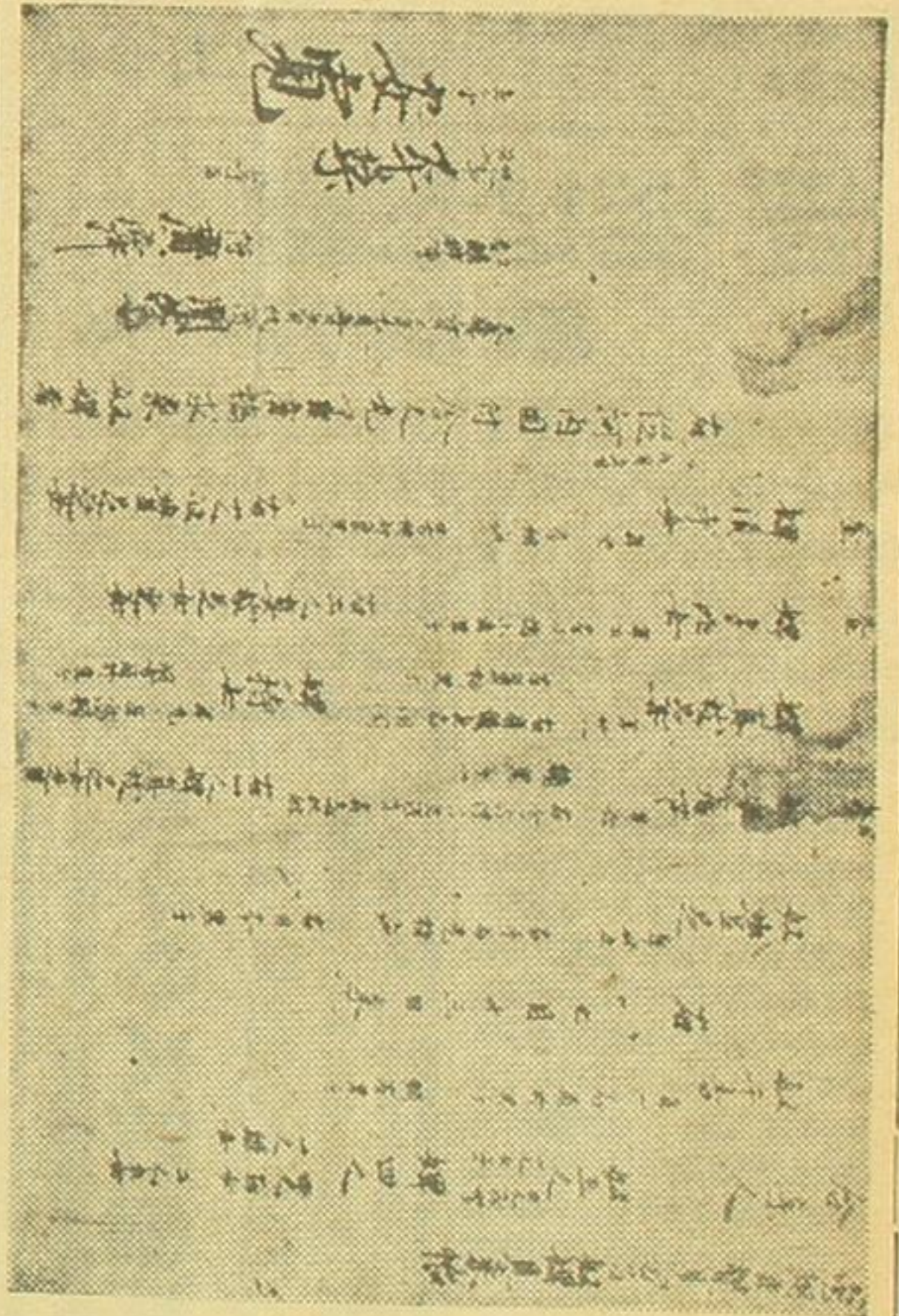
國書二拾卷、指卷三、元平、武田公  
の公、各々相あつた、十五書、い、の回、  
二道、のあ、エン、十、群、と、集、め、  
り、と、ま、り、あ、つ、た、  
例、像、心、あ、つ、た、  
ハ、別、名、を、掛、  
を、田、中、伯、が、  
あ、つ、た、  
趣、味、  
と、括、  
登、自、  
唯、

○田中伯も往年書り給へられた古文書十一枚の比類  
調査に指定せられた。此古文書の元本は『大田伯耆の  
』の各々相あり、古文書の『』の同書紙一  
二通位ありしが、エッセイ集の『』より、巻頭と傍  
りとしてありてある。『』が早稲田より、『』も  
同様にあり、いつのや、大分述山所也の誤り、『』の早稲  
田別荘を構へておられた。『』が保良業の『』と別荘  
を田中伯が買取りて住しておられた。自公の書の中別荘に  
ありと伯が訪ねて来たんだ。『』と『』の間、古書  
趣味の『』と『』の言を信託人として、伯二時河を『』  
と傍りた時、伯の『』の古文書と『』の『』の『』  
際、自公から『』の『』の『』の『』の『』の『』



國寶に指定

紙本墨書東大寺文書 十卷



聖德太子御遺教の古本が五三から成る... 日交書巻四十八巻を以て贈り... 皇天文書(二十五巻十卷)大... 聖德太子御遺教の古本が五三から成る... 日交書巻四十八巻を以て贈り... 皇天文書(二十五巻十卷)大...

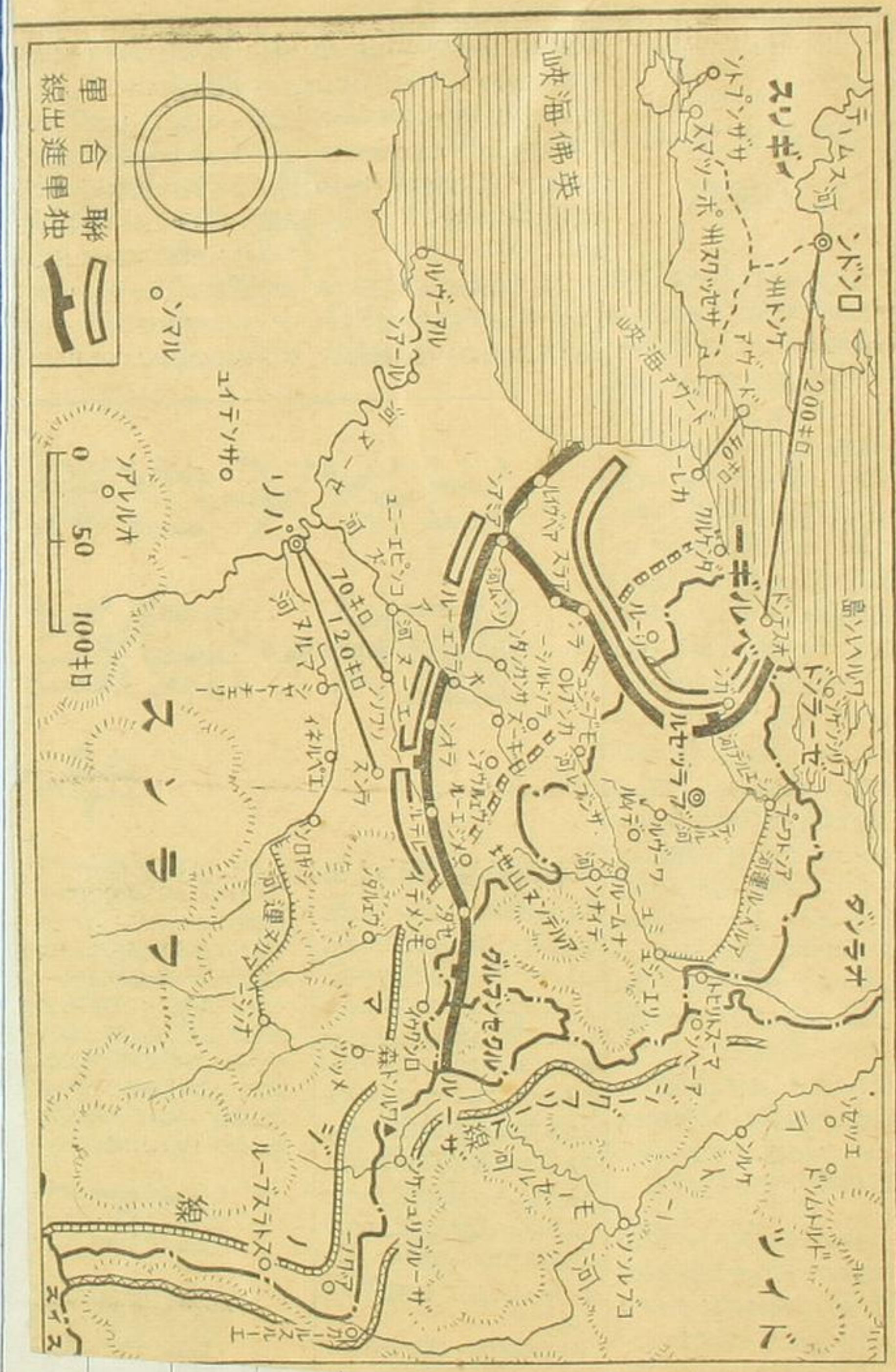
カハ在るの古本... 此の古本の... 此の古本の...

聖徳太子御遺教の古本が五三から成る... 日交書巻四十八巻を以て贈り... 皇天文書(二十五巻十卷)大...

紙本墨書

此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の... 此の古本の...





黒崎征伐

○二十三日朝の之間の大掃除に二階の押入の中から、  
 どのか出て来た、えん、豊洲の敗下を言いた太上威成佐の旗本が  
 全部揃つてゐる。巻尾とんと市島、徳施本とあるから、宗  
 家のよむあつたことか分らぬ、とて、自分の家と在るか、いふを  
 して、肥後へ、此旗本の堅、バ、枝、三人汗、と、西、日、面、を、刻、して、四、枚  
 其の十部計、山田、清、心、と、托、し、摺、つ、て、又、い、と、期、して、ゐ、る、(五月廿  
 四日記)

○獨軍、の、遂、に、カ、レ、ー、を、占、領、し、た、カ、レ、ー、は、海、峽、を、流、つ、て、英、出  
 の、連、す、る、最、捷、攻、め、を、し、て、前、山、平、を、攻、め、つ、て、先、が、英、の、佛、の  
 艦、隊、を、海、へ、一、掃、し、た、獨、軍、の、死、行、杖、の、流、動、を、ゆ、り、て  
 先、と、り、得、る、か、否、や、い、ふ、の、能、く、な、ら、ぬ、が、此、上、流、し、て、あ、つ、た



# 奇手縦横のドイツ

攻防  
二題

## 落下傘兵の姉妹篇

### 快速の自殺部隊

#### 擬装して敵地に突入

【ロンドンにて廿四日高松特派員發】  
北佛海岸に奪取した敵機はまたも新手の「自殺部隊」を遙か先頭に立て、奇勝を博した。これは大自動自轉車隊の進軍だ。戦車に開いた間隙を突進し、アベツイル、ブローニユに達し、英軍指揮の間に達した。それは三人乗の自動自轉車にサイドカーをつけ、これに隊を編成し、後にも一人乗りシユナイツセルの小機銃を持ち、尻の下に手榴弾の籠を下げてあるほか小銃一挺を備へ、小隊指揮官といはれる、面白いの

は軍服を隠すため普通の上つ張りをまとい、鐵兜の代りに革の面をかぶつて巧みに擬装してゐる。戦車の數倍の速力で前進し、落下傘部隊と協力し、遺跡を偵察し、電報所を占領し、火し、機銃を投ずる。敵地にまじつて、身を隠し、戦車隊を突入するので、連隊を基地に歸れぬところから、自殺部隊といはれ、目下自衛隊の争戦に非常な活躍をいつあり、ウエイガン部隊はこれに驚愕を感ずるとのことだ。

森田製

英師が上釘のとき其境に入つてゐる所へは伊田が起つて殆どは接撃するところであつた。大甲と銃と香餌とで伊田の戦を止めんとし、伊田の香餌の微々たる一笑、遠くから起るとしてゐる、米もソも殆どは窮乏を感ずることを嘆つて英師の敗北後、獨逸軍の敵、米もソも殆どは窮乏を感ずることを嘆つて英師の勝利の餘威を以て相手を止むに似たり。其軍三十占領地は作らざる戦をあらうから、前途は洋々たるよかあると、想念する。早く又安んじ、英師の運命は既に決まると、其の感ある人から、後の事を想ひ、伊田の運命は既に決まると、其の感ある人から、戦術を起して一敗、伊田の運命は既に決まると、其の感ある人から、老女、此の敗り、伊田の運命は既に決まると、其の感ある人から、

○日支の紛争は、今、重慶を毎日のやうに爆撃されてゐるが、  
二十日、また、ついでに、重慶を、五日の間に、味方、空軍、攻め、破る。日  
軍、揚子江の河口を完全に占領し、龍動に向つて、  
が、最早、時々の問題として、今、揚子江の聯合軍の包  
圍、力を、試み、みる。生つた、分市を、めぐる、英軍、  
向つて、の形、なつ、あつ、聯合軍の包圍を、脱し、やうと、死

陸軍部

死、よ、の狂、い、抵抗、して、あつ、が、最近、日軍、の、攻、め、  
た、と、い、ふ、と、あつ、此、の、包圍、を、破り、英軍、の上陸、して、め、つ、た、  
退、路、を、保、つ、て、みる、か、と、或、の、戦、況、の、運、命、を、出、す、か、と、  
も、い、ふ、ま、つ、。揚子江、の、河口、を、占領、する、英、の、艦、隊、を、打、破  
す、る、か、と、い、ふ、揚子江、の、北、部、制、海、権、を、持、つ、た、利、益、を、  
擁、つ、つ、と、い、ふ、揚子江、の、北、部、兵、隊、を、恐、ろ、く、入、る、か、と、い、ふ、あ、つ、  
日、軍、が、日、前、に、現、在、する、と、い、ふ、か、と、い、ふ、水、雷、艦、の、出、動、の、  
速、力、が、早、く、して、あつ、が、敵、艦、を、破、つ、つ、と、い、ふ、出、果、と、あ  
つ、と、い、ふ、進、退、が、あ、つ、つ、も、早、い、か、と、い、ふ、た、ち、の、去、来、と、い、ふ、  
か、と、い、ふ、或、の、工、事、を、用、い、て、敵、艦、を、阻、つ、つ、と、い、ふ、  
ち、の、か、と、い、ふ、急、急、と、い、ふ、揚子江、の、河口、を、占領、する、か、と、い、ふ、  
ヒットラーは、ドローンは、前、より、英、軍、の、防、衛、を、破、つ、つ、と、い、ふ、

と云ふに免の角柄の本をよと侍杖の兵が三万とあつたと云ふ  
れんか皆河使と云ふ兵地と云ふと、英吉利服と云ふは陸ありて  
英佛は打腰つれ後七ノ服と雖も免今もあつたといふ  
免の角こ一辺るが、英佛真土の政略の事、(五ノ廿六  
日記)

此本書きりつるに、じオは後、五十萬の大軍を擁  
し連合軍に入参りしとある、白耳義の突如其仙の文  
陽より得の二軍の降伏したと後、英吉利の政略  
ハ大なること、このり、あふ向の法野の國王の命を被從、  
七ノ、尚祝戦を續け、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
せし、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
の、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表



五ノ廿六

聯合軍の弱點は余今一途に出す全軍統制を缺く事、是  
くの軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
合兵率者、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
皆、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
横、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
あつた、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
國王の降服の事、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
く、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
國軍の令妹の勅生、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
の、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表  
是、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の軍、この事、英吉利の表

# 英佛の違約を痛憤

## 獨側發表 白皇帝遂に最後の斷

【ベルリン特電二十八日發】如何にしてベルギー皇帝が降伏を決議されるに至つたか、レオポール二世がドイツ軍に無條件降伏を決議されるに至る迄の事情をドイツ側は非公式に次の如く發表してゐる。

### 聯合軍 新任の總指揮官

ウェーガン將軍は去る二十日飛行機でレオポール皇帝をその總司令部に訪れた。勿論ベルギー軍を攻撃し新しい作戰を打合せるためであつたが丁度この日ドイツ軍の總司令部はサンカンタンよりアミアンを経てフランス西部岸のブワイルに遷都し聯合軍にとつて戰局は既に悲觀すべき状態であつた。然しベルギー軍は未だ一體の

希望を以て維持するの望はしきと見解が有力な時であつた。皇帝とウェーガン將軍との會談は必ずしも友好的な雰囲気には終始しなかつたが、皇帝はウェーガン將軍に依つて置かれた新しき英佛兩國の援助協力を信じて共に戦ふべきことを誓はれたのであつた。

即ちフランス軍は當時向フランス領に突入せるドイツ軍の占領地の危険なる時に新編成の強力な部隊を以て南方より海軍の側面を衝き之を切斷して包圍された聯合軍との連絡を斷るべきことを確約し又英海軍は大艦隊をベルギー海岸に出勤させベルギー軍の抵抗を援助することを堅く約束したのである。

然しこの英佛の約束は履行されなかつた所が戰局は遂に日増しに聯合軍に不利に傾き遂にベルギー戰線に派遣されたイギリス軍が海軍の援助より棄絶して

即ち二十七日夜十一時皇帝は軍使を獨軍の總司令部に送り軍使數名を白旗を掲げて獨軍陣地に至り當該獨軍司令官の即ち案内された。

泰京製

この如く、遂に脱出して軍艦や汽船に逃がれ、戦局は遂に日増しに聯合軍に不利に傾き遂にベルギー戰線に派遣されたイギリス軍が海軍の援助より棄絶して

この如く、遂に脱出して軍艦や汽船に逃がれ、戦局は遂に日増しに聯合軍に不利に傾き遂にベルギー戰線に派遣されたイギリス軍が海軍の援助より棄絶して

(六月七日)



# 佛今こそ決死起たん

## フランダーの大敗戦に見る

### 聯合軍「戦争精神」の弱さ

【ベルリン本社特電】 フランスにおけるわが軍は新段階に、たごを告げる第一撃だ。このドイツ軍の新行動が、パリを占領せよ、またはマゾン本線を襲撃せよ、フランス軍を後方から迂回包圍せよとするが如き部分的作戦ではなく、この一戦に於いて事實上の勝利を得るべきである。

くして、實に全フランス軍の腹を目的とするものは明かだ。それは同時に全フランスの攻勢を目的とするのである。佛軍がこの一戦に敗れて事實上の勝利を得るべきである。

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

【ベルリン本社特電】 フランスにおけるわが軍は新段階に、たごを告げる第一撃だ。このドイツ軍の新行動が、パリを占領せよ、またはマゾン本線を襲撃せよ、フランス軍を後方から迂回包圍せよとするが如き部分的作戦ではなく、この一戦に於いて事實上の勝利を得るべきである。

くして、實に全フランス軍の腹を目的とするものは明かだ。それは同時に全フランスの攻勢を目的とするのである。佛軍がこの一戦に敗れて事實上の勝利を得るべきである。

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

# 獨軍の電撃に眩惑

## 鐵環突破の斷を失ふ

### 英佛軍、兵器の劣弱さよ

五月十日の夜、ドイツ軍の白蠟部隊が、フランスの北軍を突破し、パリを占領せよ、またはマゾン本線を襲撃せよ、フランス軍を後方から迂回包圍せよとするが如き部分的作戦ではなく、この一戦に於いて事實上の勝利を得るべきである。

くして、實に全フランス軍の腹を目的とするものは明かだ。それは同時に全フランスの攻勢を目的とするのである。佛軍がこの一戦に敗れて事實上の勝利を得るべきである。

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

将少軍種々本社  
平彌場大

# 山口龍

山口龍の戦況は、フランス軍の北軍を突破し、パリを占領せよ、またはマゾン本線を襲撃せよ、フランス軍を後方から迂回包圍せよとするが如き部分的作戦ではなく、この一戦に於いて事實上の勝利を得るべきである。

くして、實に全フランス軍の腹を目的とするものは明かだ。それは同時に全フランスの攻勢を目的とするのである。佛軍がこの一戦に敗れて事實上の勝利を得るべきである。

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

# 破毒を斷

破毒を斷の戦況は、フランス軍の北軍を突破し、パリを占領せよ、またはマゾン本線を襲撃せよ、フランス軍を後方から迂回包圍せよとするが如き部分的作戦ではなく、この一戦に於いて事實上の勝利を得るべきである。

くして、實に全フランス軍の腹を目的とするものは明かだ。それは同時に全フランスの攻勢を目的とするのである。佛軍がこの一戦に敗れて事實上の勝利を得るべきである。

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

△：英國 上陸軍の援助を

勝利に氣を得て漸く南下するドイツ軍をフランスは阻止せよ。フランス軍は、フランダーズにおける第一撃の成績からいふところでは危ぶまれる。殊にベルギー方面に行動したフランスの北軍は、この有力な戦軍を失った。かつ

# 今こそ決死起たん フランスの大敗戦に見る 聯合軍「戦争精神」の弱さ

フランスにおける戦況が新段階に突入する。このドイツ軍の新行動がパリの占領とか、或はマニッシュ本線を渡る部隊を後方から包圍せんとするが如き部分的作戦ではなく、一戦に敗れて事實上盟約力喪失を免れなくなつたフランスの運命は、極めて危ぶまれる。殊にベルギーに行動したフランスの北軍は、この第一撃の総合戦果を見て、諦しも見逃かせぬ重大な事實がある。それは史上未曾有の大敗戦でありながら死傷の甚だしいといふ點である。

ドイツ軍はこの百廿万の数を揃へ、二十七日の夜にパリに突入した。この一戦には甚大な犠牲を蒙つたが、これはいよいよドイツ軍の大勝利である。この一戦に敗れて、フランスの盟約力は喪失し、フランスの運命は極めて危ぶまれる。殊にベルギーに行動したフランスの北軍は、この第一撃の総合戦果を見て、諦しも見逃かせぬ重大な事實がある。それは史上未曾有の大敗戦でありながら死傷の甚だしいといふ點である。

存亡のものと考へるドイツ國民は、この大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。ベルギーの門前に英佛兵の一人は、この大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。

フランスの大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。ベルギーの門前に英佛兵の一人は、この大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。

存亡のものと考へるドイツ國民は、この大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。ベルギーの門前に英佛兵の一人は、この大敗戦を前にして、防具と見る英佛國民との戦意に對する悲憤の相違が、まさしくこの一戦に現れてゐる。

## 電撃に眩惑

### 鐵環突破の斷を失ふ

#### 英佛軍、兵器の劣弱さよ

将少軍陸女々本  
平彌場大

鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。

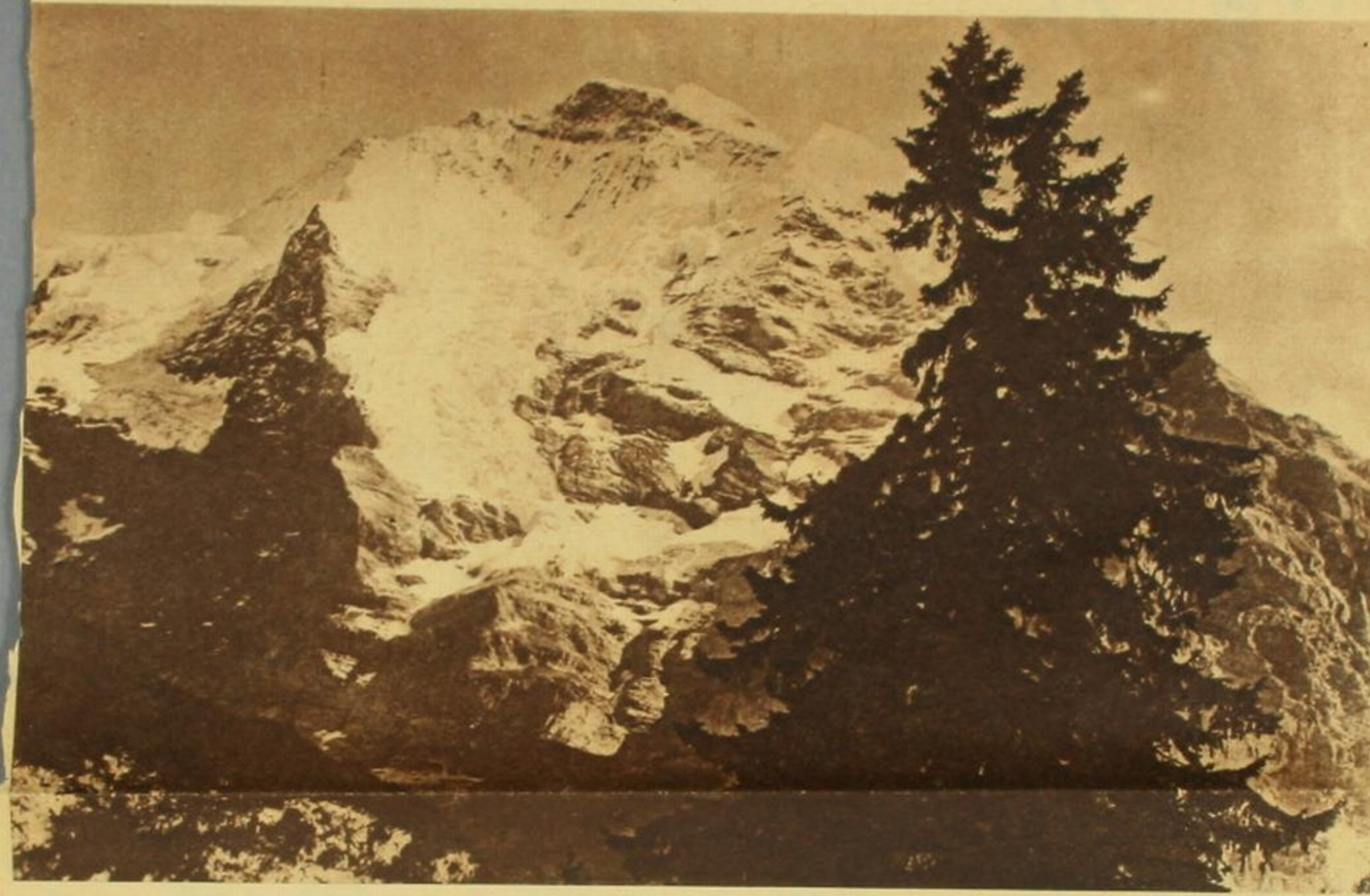
鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。

鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。

鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。鐵環突破の斷を失ふ。英佛軍、兵器の劣弱さよ。

忠魂奉獻  
一日戦死  
本社 一、〇九五、七四  
取扱 二、二二七、二一七  
合計 三百四十六萬八  
獻金受付場所 東京支  
部（日暮川  
ビル）午後  
四時まで

# 山の表情



ウラフゲンユ

を異にする、氣象がまたこれを支配する。四季で云へば、大ざつぱであるが、冬山、春山、初夏の山、夏山、秋山、初冬の山皆それぞれ特色を現示してゐる。

山の表情で私等の心を捉るものは色彩と光りであらう。私は自分の思出の山からすばらしいと思つたものについて二三點描を試みよう。

初めて越中の立山に登つた時、七月の半ばに淨土山の裾から室堂を包んで溢れてゐる大残雪を見て驚いた。富山平原は眞夏の暑さ、彌陀ヶ原高原が春融、室堂平は冬の寒さであつた。

暮れて行く立山を見送りながら私は地獄谷の方へそぞろ歩いた。立山は暮れ、大日は暮れ、剣も亦黄れてゐた。剣と大日の間を流れる立山川の谷から、白銀のやうな美しい霧雲が積と流れて行く。その上の夕霧が谷に沈んだとき、私は實に美しいものを見た。それは立山川の彼方に枯槁色にやゝ紅ををひで、夕の空に透き徹つてゐた毛勝岳の姿だ。毛勝、釜谷、猫又の三山が重なり合つたその山の窪の雪が水晶のやうに光つてゐる。白雲が二筋程帯のやうにその山中腹を静かに動いてゐる。

私はこの美しい姿を見て暫くの間付んでその方をばかり眺めてゐた。もう立山の上では夕星が光つてゐる。夕暮の寒さに驚きながら静かに暮れて行く毛勝の姿に思ひを残して室堂に歸つた。

立山と云ふ山がまた、色彩の豊かな變化のある奥深い山である。西は彌陀ヶ原に向つて美しい裾を延ばし、東は黒部谷に向つてすばらしい岩壁を露出してゐる。

文字通り雄山で如何にも男性的の力の満ちた山である。併しこの男性的の山も、あるときには滑え入るやうな淡いアウトライを描き、あるときにはアルペンローズの美しい姿となる。

初夏の六月初旬、福名谷から大日平へ登り、その美しい小笹原の上に天幕を張つた。斷崖が皆富山平原に沈んで空には一翳の雲も見えない。

彌陀ヶ原の大きなスロープの上を薬師岳が氷藍色に光つてゐる。この山は東から見ると大弧状を天半に描き、幾つものカールを懐に抱いた悠大な姿をしてゐるが、北方彌陀ヶ原や大日平から見ると如何にもすつきりとした富士型に常願寺の谷になびいてゐる。その纏つた容、その豊かな色調は高原を歩く者に親しみ深い印象を與へる。

# 山の表情



（峰の高孤） 一ノホータツマ根屋の界世  
米五〇五四高標

## 山の表情

冠 松次郎

退屈凌ぎに自分の曾て撮つた寫眞を出して見ることがある。久しく會はなかつた友達と相對してあるやうな親しみ、なつかしみが畫面から溢れてくる。フキルムや乾板を整理するときなど、すばらしかつた山の容や、谷の姿が、透明印畫となつて我の眼から心に、四肢にまで脈々とした活力を與へる。それはたゞひと色に現像されたネガではないのだ。私が見る限り會遊の思ひ出が纏綿し復活して、それには色彩もあり、光りもあり、音もある。雲を破つて姿を現はしてゐる一萬尺の峰、美しい森林の中から溢れてくる溪流、印畫を見てもるとそんなものが何時の間にか私をとり巻いてゐる。机によりかかり煙草をふかしながら、私は寫眞から當體の大自然に面接して陶然となる。風塵の都會の一隅で、逍遙遊の境地を辿るので。

山の容、山の色彩、人格的に云へばその表情は時々刻々と變る。モメンタルの美しさがある。一日で云へば、朝、夕、日中で全く趣

遊沙河  
 泥乾却路樹化飛暗幽趁約自不遺滴  
 瀝山飄携酒冽噴喘野店煮魚肥遠林  
 老綠暎新綠遊客生衣交熟衣更擬歸  
 家為一笑村籬飛醉折葉微

賴襄

文蔚三年詩作先至十時卅一歲也

東京 文房堂製

王荊公勸學文

讀書不 <sub>レ</sub> 破費	讀書萬倍利	書顯 <sub>レ</sub> 官人才
書 <sub>レ</sub> 添 <sub>レ</sub> 君子智	有 <sub>レ</sub> 即起 <sub>レ</sub> 書樓	無 <sub>レ</sub> 即致 <sub>レ</sub> 書櫃
窓前看 <sub>レ</sub> 古書	燈下尋 <sub>レ</sub> 書義	貧者因 <sub>レ</sub> 書富
富者因 <sub>レ</sub> 書貴	愚者得 <sub>レ</sub> 書賢	賢者因 <sub>レ</sub> 書利
只見 <sub>レ</sub> 讀書榮	不見 <sub>レ</sub> 讀書辱	賣 <sub>レ</sub> 金買 <sub>レ</sub> 書讀
讀書買 <sub>レ</sub> 金易	好書卒 <sub>レ</sub> 難逢	好書真 <sub>レ</sub> 難致
奉勸 <sub>レ</sub> 讀書人	好書在 <sub>レ</sub> 心記	

の百八十萬の大軍を擁して獨甲の佛都を刻々迫  
 りてある。佛都の陥落を以て是を以てせんとして  
 急の佛人を以て伊國の遂に獨側を去り、佛の背後を  
 衝かんとする。佛の英國の援助を米國の援助を  
 仰ぐ藉うること公衆來きしと、此の有方なる獨の後  
 援を敵として戦ふは、伊の獨を味方として、佛の獨を  
 敵とす。伊の獨を味方として、佛の獨を敵とす。伊の  
 獨を味方として、佛の獨を敵とす。伊の獨を味方として、  
 佛の獨を敵とす。伊の獨を味方として、佛の獨を敵とす。

高見澤木版

# 伊參戰と國際關係

## ローマ帝國再建

### イタリア民族の宿願

法學博士  
 米田實

イタリアは十日迄に英佛に對し  
 宣戰を布告した。ムソリニ首相は  
 「われは戰爭が斷ずるやめ  
 る位迄と犠牲を以て直向する用  
 意がある」「われはわれは  
 を破らしめんとする地中海の鉄  
 頭を破らんとするのだ」と宣言し  
 たのである。そして伊軍は露光石  
 火、北アフリカの佛領テニニス  
 (前種四萬八千方マイル、人口二百  
 六十萬のフランス保護領)とヨル  
 シカ島にも攻戰を始むれば、アン  
 ス南部リヴィエラにも進出し、又  
 英海軍根據地マルタ島にギリシア  
 領コルフ島も進軍の目標に入つた  
 如くである。

かくの如くして来る可きもの  
 が遂に來つたことを、我等は今更  
 ながら驚駭せねばならぬのであ  
 る。

一  
 點を、ムソリニ首相は、一は  
 既に英佛の大北四年四月二十六日  
 ロンドン條約不實行といふ不都合  
 行爲を悔悛したため、一は自國の  
 鉄無く石炭無く海なく糧なく半  
 毛なき貧窮の狀態を救はんとす  
 意したため、大正十五年四月八日  
 北アフリカ行の艦隊カヴール號  
 上、大膽に、此海の獨を以て  
 ローマであつたと説き、予の此航  
 海は單なる行政的行動ではなく、  
 伊國民の力の強證である。ローマ

於ける「第三國との戰爭に於ける  
 海軍の力に於ける實力を以てする  
 助(第三條)及びに軍備不均衡・  
 不講和(第五條)の條約は成立し  
 たものである。

だが昨夏獨破明瞭期には、イタ  
 リアは同分にも海軍獨破が缺けて  
 るた。加ふるに伊中獨を破り英佛  
 海軍は今の海軍獨と異り、優勢で  
 あつた。ためにイタリアは昨年八  
 月未ヘルリンのヒトラー、チアノ  
 會見(電話)によるムソリニとの相  
 談を告じしに於いて海軍獨の廢止を  
 求めたのである。然るに今更、一方  
 九個月の日子は遂に伊の海軍獨を  
 成せしむると共に、他方昨秋から  
 今春にかけて斷斷的に行つてゐたフ  
 ランスの伊國中立確保工作(即首  
 相、即外相ダンテ中心となりイ  
 タリアに對する紅海、佛領シブチ  
 の海軍、スエズ運河に於ける伊國  
 海軍の威嚇、テニニス伊人待遇改善  
 等を條件としたもの)がイタリア

大河内 高見澤木版  
 後期代篇 七  
 大見澤木版  
 高見澤木版  
 大河内 高見澤木版  
 後期代篇 七













氏均田青



氏郎太熊多本

# 勝敗は既に決す

## 英國は長期抗戦か

談氏郎太熊多本

目下露上白黒の本多氏自説、吹き渡る風も終に染み込んでくる。勝敗は既に決す。英國は長期抗戦か。...

# 豫断は下せぬ

## 戦争は寧ろ之から

談氏均田青

北米 予り大きいぞ、フランクも然り、そこだ、獨り英國のみが世界的大國である。...

私の考へては日英米の三大海軍國中實には英海軍が一番強い。...

豫断を下す事は、フランクの豫断を下す事と同じである。...

海軍の放逐によるフランドーに防壁するかにあつた。...

平和の希望とは行くまい。英國の形勢非難は非なるほど。...

余裕を不したる英國人が特別のねばりを經濟戰と進行させて居らたへるかどうか。...

獨り休戦談判の今迄を  
往年物々佛國の法廷  
さでんれ日一と家を並  
びもこい表いも停戦  
の序曲と定めて去年  
の全序と決りあはれ、  
委細のたりの

東京 隆東 北 發行所

圖書總目錄

東京書籍商組公認發售

圖書總目錄の發行所

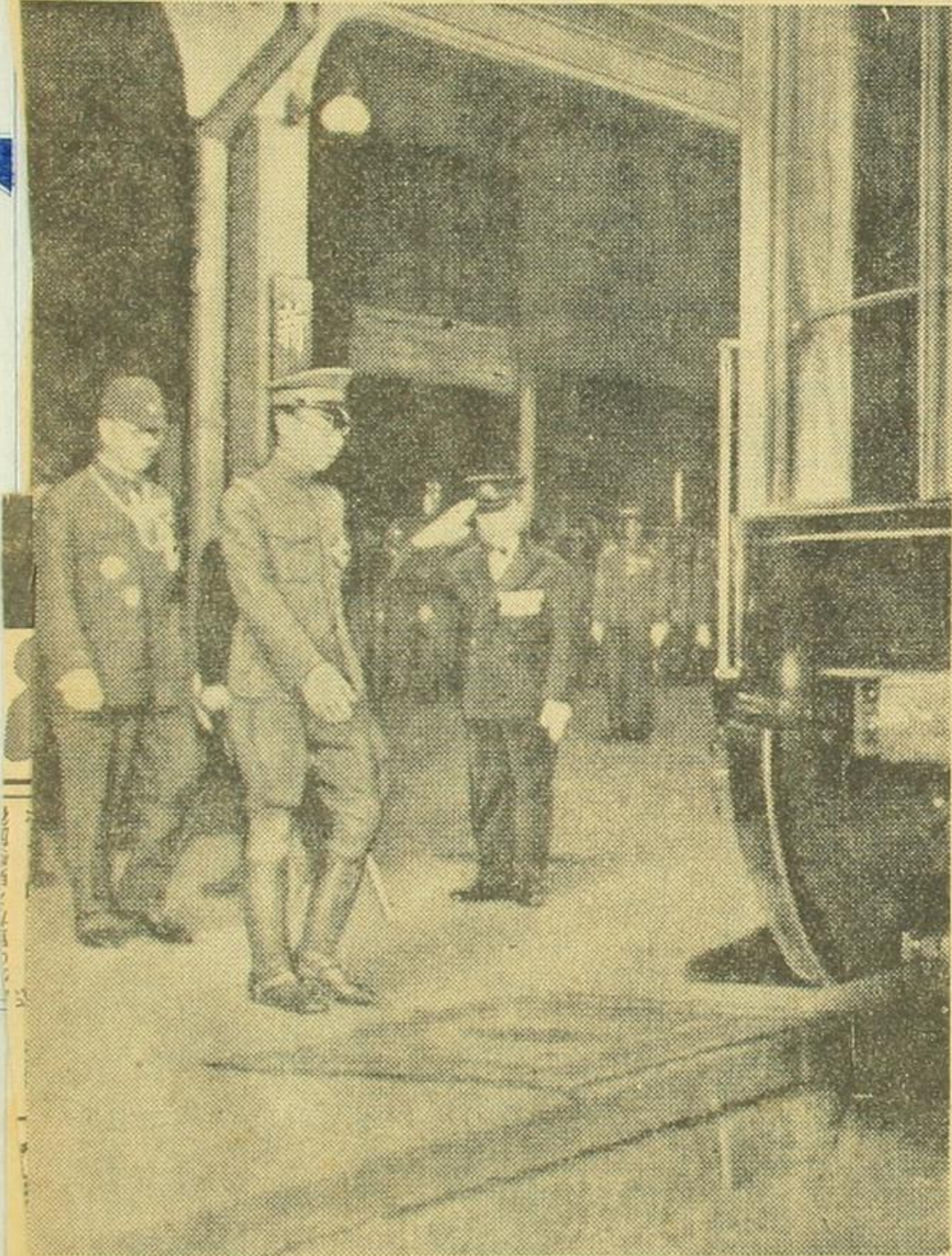
圖書總目錄の發行所



東京書籍商組公認發售

食糧問題の真相... 日本經濟力の衰退... 英佛米國の運命...

實 英 日本經濟力の衰退... 英佛米國の運命...



陛下御來訪の節、天皇陛下に...

陛下御來訪の節、天皇陛下に...

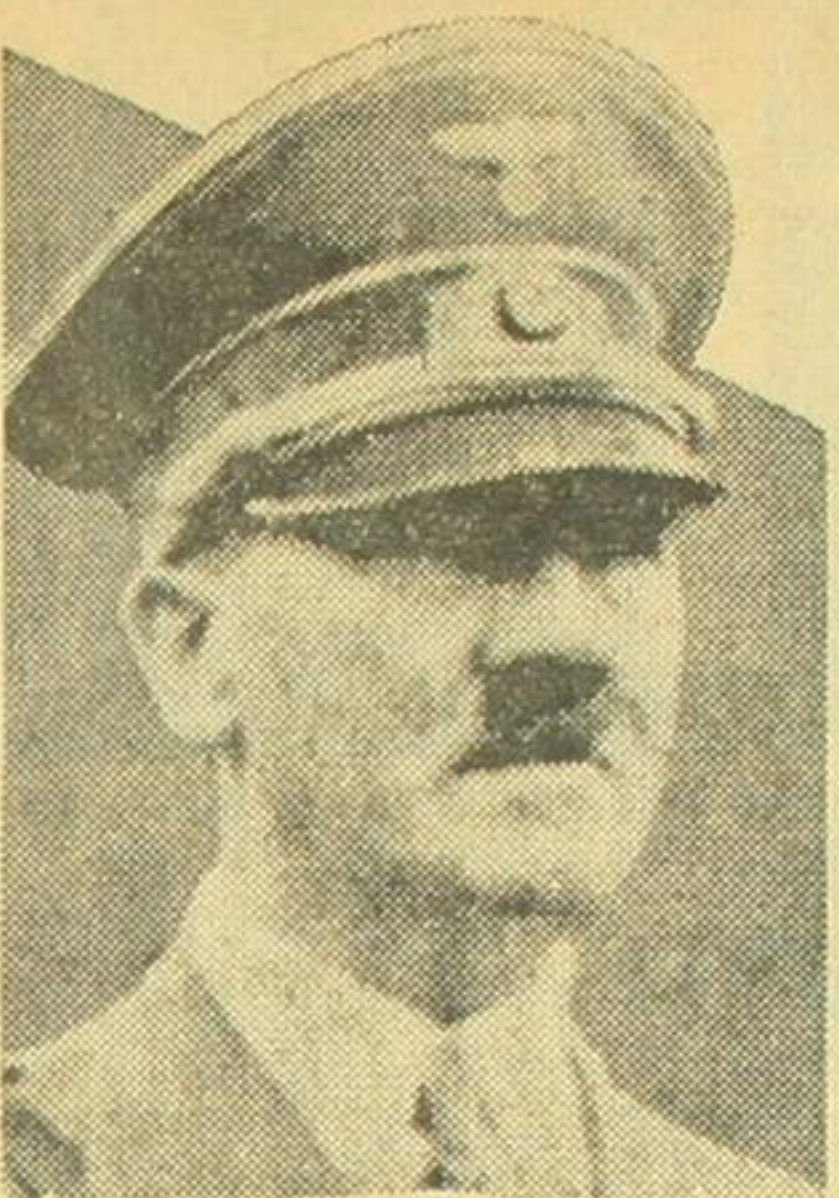
英 廣東廿一日發回照... 國境に沿つて東西に走...



# 獨佛休戰會議開かる

## ヒ總統自ら臨場

### 佛代表に條件を手交



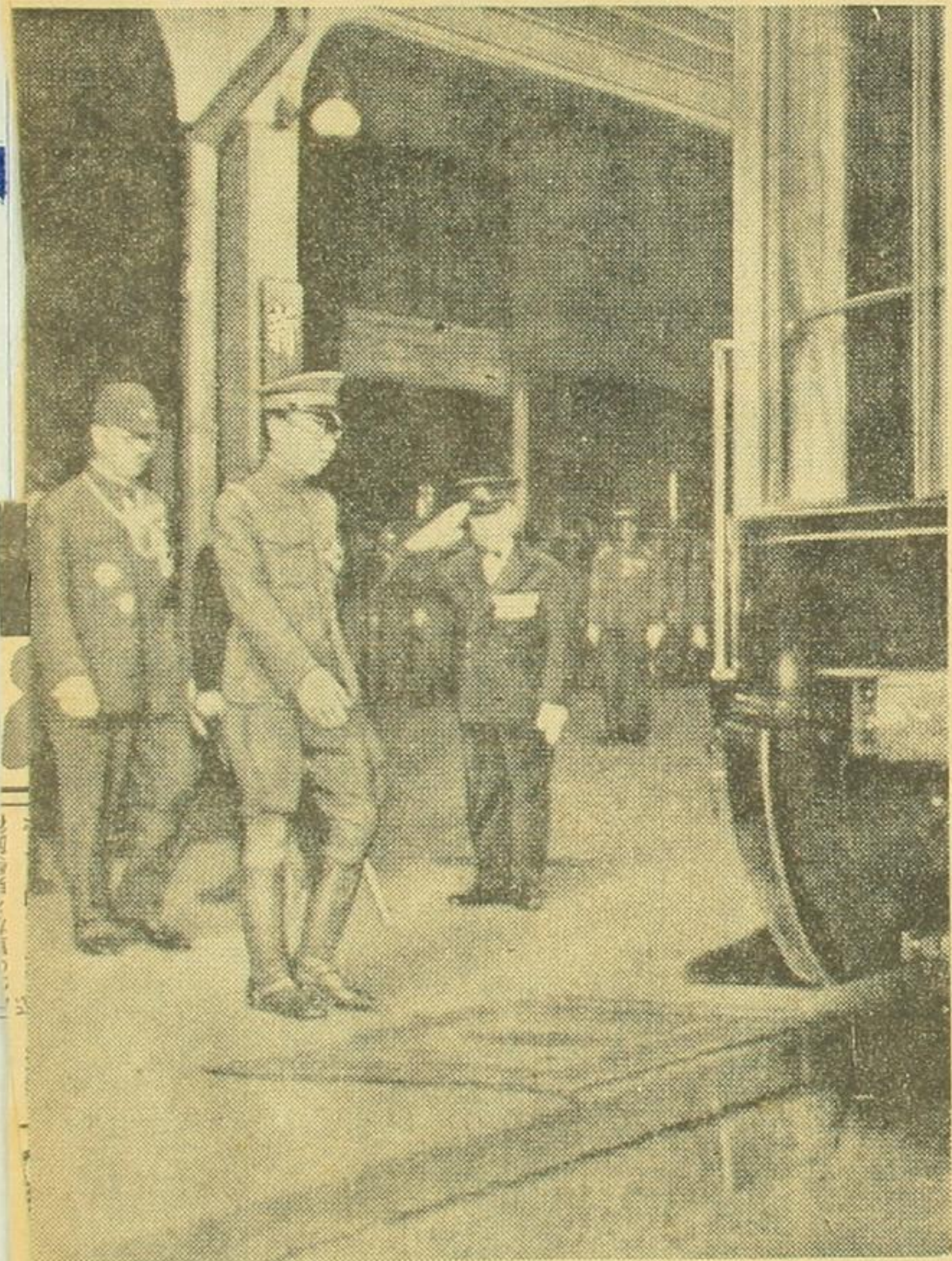
【ベルリン特電二十一日發】全世界の凝視の的になつた獨佛休戰會議は二十一日午後三時半(日本時間午後十一時半)北佛コンピエーニユに於て開かれた。會場は前大戦時ドイツが佛軍艦隊官オッシュニ元帥により強制的に押つけられ涙を呑んで之を受諾した地コンピエーニユの森の森も同休戰條件の調印の行はれた記念の客車内である。ヒトラー總統は幕僚長カイテル將軍、同陸軍總司令ブラウヒツチ將軍、ヘス副總理、リッペンントロップ外相を帶同會場に臨み、劈頭カイテル將軍は休戰條件の前文を讀み上げた。ヒトラー總統は休戰條件を提示するは前大戦によりドイツの軍事的榮譽の上に加へられたる拭ひ得ざる屈辱を想起し且つこれを拂拭せんがためである」と述べ對佛講和の目標として別項の如き三項を明示し休戰條件を提示、佛代表に受諾を要求した。ヒトラー總統はドイツ國歌の奏樂裡に意氣揚々會場より退出した。【電報はヒトラー】

## 對佛講和二百目標發表

【ベルリン特電二十一日發】ドイツ政府は二百の三つの目標を發表した。一、フランスに於ける戰闘繼續の防止。二、フランスに於ける戰闘繼續の防止。三、フランスに於ける戰闘繼續の防止。

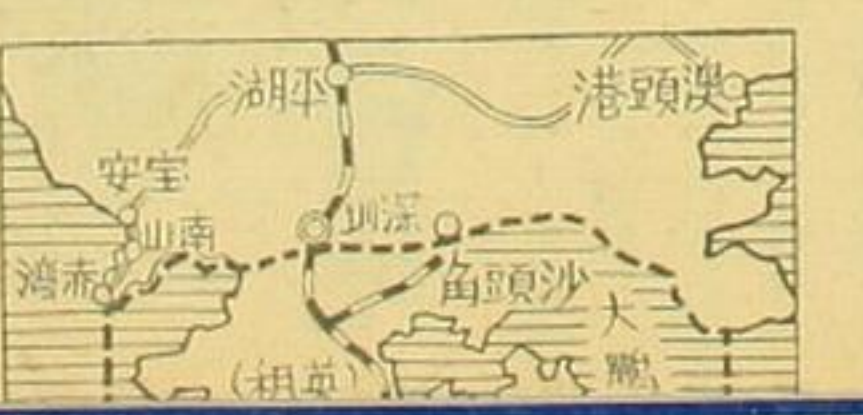
【ベルリン二十一日發】獨佛休戰會議は二十一日午後三時半(日本時間午後十一時半)北佛コンピエーニユに於て開かれた。會場は前大戦時ドイツが佛軍艦隊官オッシュニ元帥により強制的に押つけられ涙を呑んで之を受諾した地コンピエーニユの森の森も同休戰條件の調印の行はれた記念の客車内である。ヒトラー總統は幕僚長カイテル將軍、同陸軍總司令ブラウヒツチ將軍、ヘス副總理、リッペンントロップ外相を帶同會場に臨み、劈頭カイテル將軍は休戰條件の前文を讀み上げた。ヒトラー總統は休戰條件を提示するは前大戦によりドイツの軍事的榮譽の上に加へられたる拭ひ得ざる屈辱を想起し且つこれを拂拭せんがためである」と述べ對佛講和の目標として別項の如き三項を明示し休戰條件を提示、佛代表に受諾を要求した。ヒトラー總統はドイツ國歌の奏樂裡に意氣揚々會場より退出した。【電報はヒトラー】

【ホルド佛】フランスは獨佛休戰會議は二十一日午後三時半(日本時間午後十一時半)北佛コンピエーニユに於て開かれた。會場は前大戦時ドイツが佛軍艦隊官オッシュニ元帥により強制的に押つけられ涙を呑んで之を受諾した地コンピエーニユの森の森も同休戰條件の調印の行はれた記念の客車内である。ヒトラー總統は幕僚長カイテル將軍、同陸軍總司令ブラウヒツチ將軍、ヘス副總理、リッペンントロップ外相を帶同會場に臨み、劈頭カイテル將軍は休戰條件の前文を讀み上げた。ヒトラー總統は休戰條件を提示するは前大戦によりドイツの軍事的榮譽の上に加へられたる拭ひ得ざる屈辱を想起し且つこれを拂拭せんがためである」と述べ對佛講和の目標として別項の如き三項を明示し休戰條件を提示、佛代表に受諾を要求した。ヒトラー總統はドイツ國歌の奏樂裡に意氣揚々會場より退出した。【電報はヒトラー】



陛下御來訪の節、天皇陛下に  
おかせられては左記の通り行  
幸あらせらるべき旨仰出され  
たり  
六月廿六日 東京御行幸△  
午前十一時十分御出陣、同  
幸  
午後三時半御出陣、同二時  
五十分赤坂陣營御留幸△  
七月一日 赤坂陣營御行幸△  
午後二時十分御出陣、同二  
時五十分赤坂陣營御留幸△

翌日御開く日御二心一の質を御  
身をもつて示させ給ふことは畏き  
極んで今回の再度の御訪日は日御  
國交史上に傑たる光輝をそへるも  
のを持される。この御皇陛下下には  
は未だに御起床、驚泣休御遊ばさ  
る御先導にて中和門から御車客に  
進ませられ、麗花殿御離れ御紅の  
御召自動車に御乗車  
工務院御長官、浪待御武官  
長、京商軍府大臣、照宮内大  
臣、吉岡御空軍用機、長尾皇宮



【廣東廿一日發】  
國境に沿つて東西に走  
で人口約千、國境線  
を越える注意をもつ  
て細心なる注意をもつ  
化するに及び情  
【赤城廿一日發】  
國境に沿つて東西に走  
で人口約千、國境線  
を越える注意をもつ  
て細心なる注意をもつ  
化するに及び情

# 英

# 英

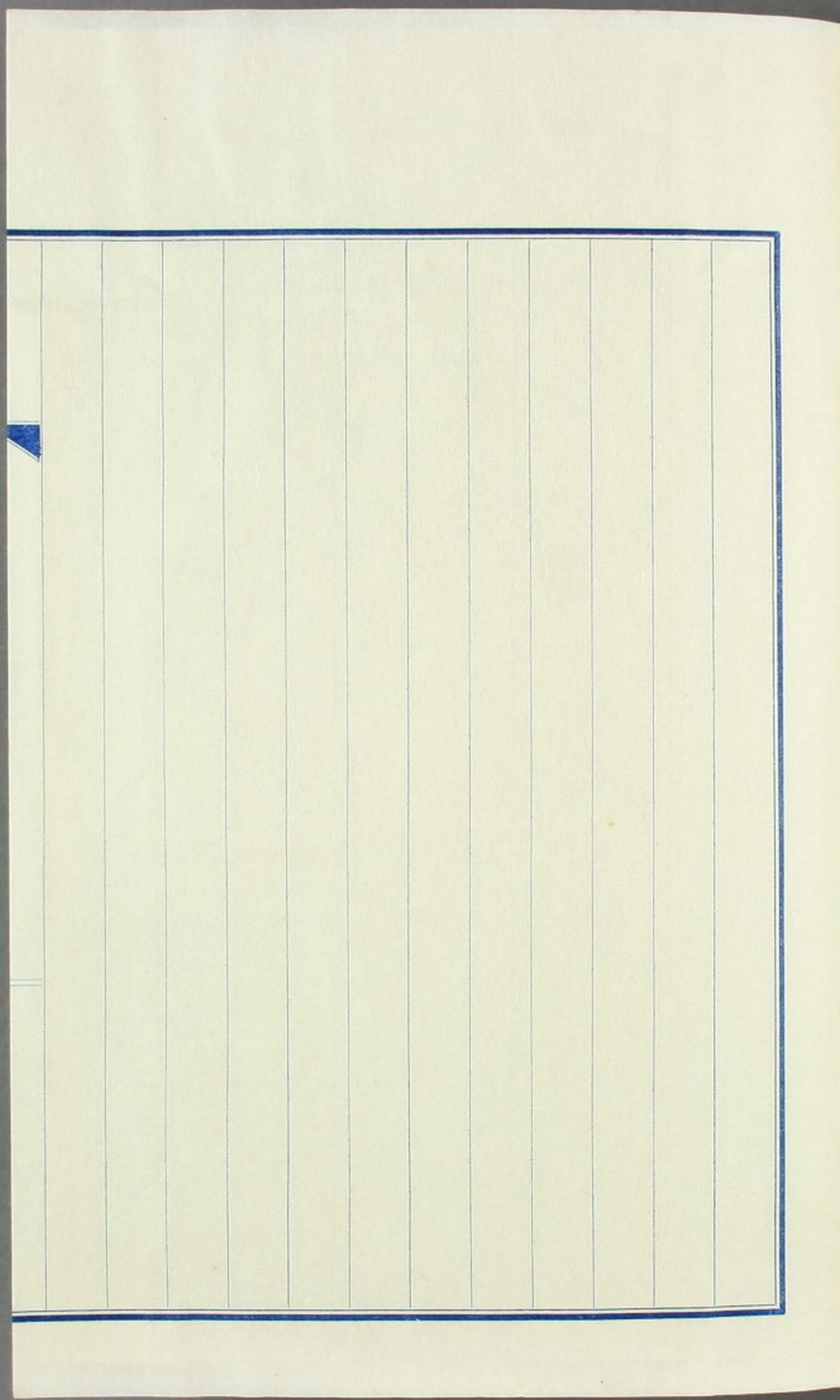






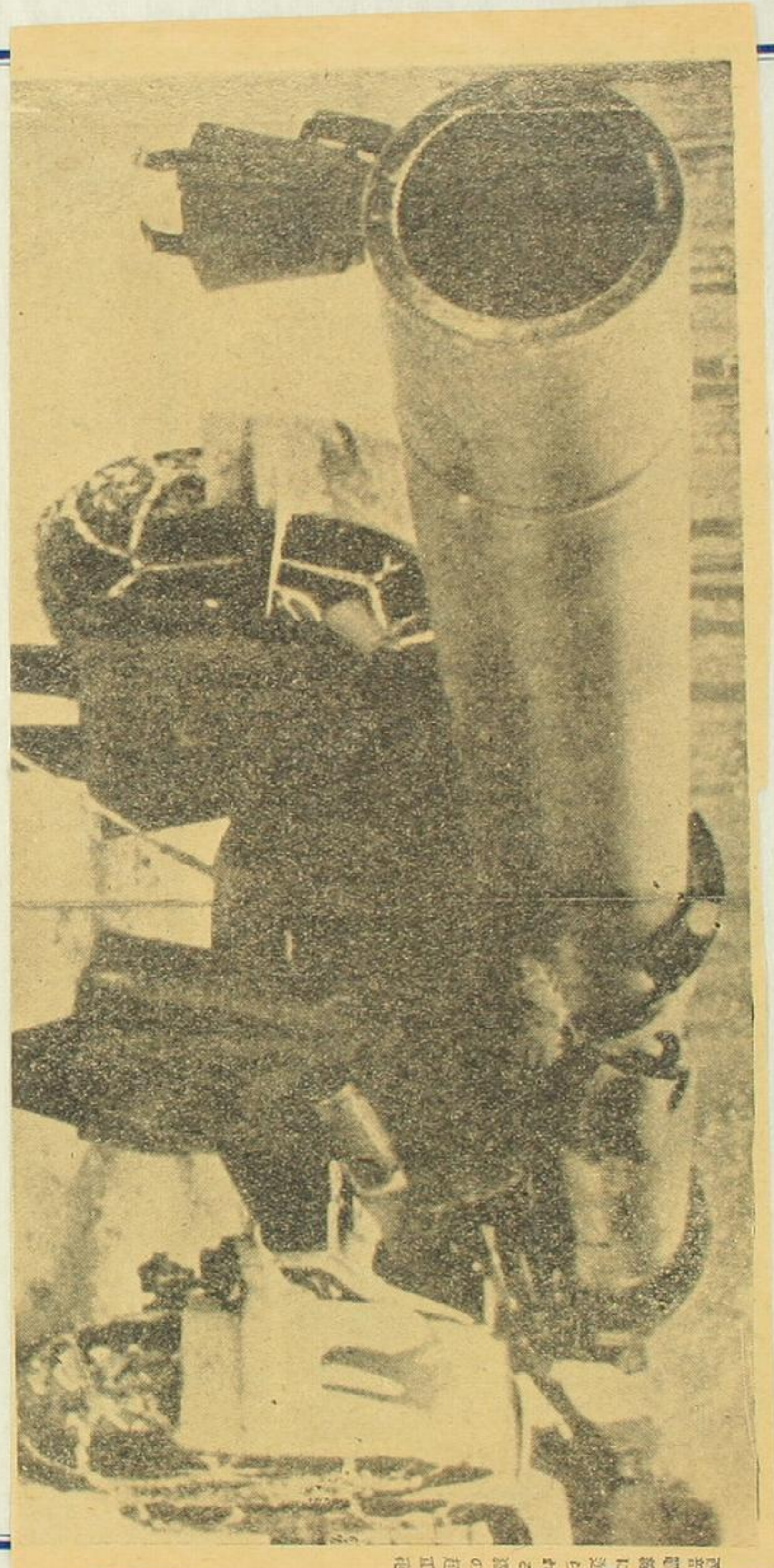






東京





此の機は、電線に架かる塔の一種也

電線塔

國覽

國覽

國覽

